移住者の声・市民の声

住んでみると気付く須坂の良さ　／　春木町　井出和樹さん

今回のインタビューは、春木町にお住いの井出和樹さんです。子供時代は、お隣の長野市で育ち大学は東京で学んだという井出さん。
就職して、佐久市で仕事をされていたそうですが、2014年の10月に仕事の関係で須坂市に引っ越してきたそうです。引っ越して間もないからこそ感じる、須坂の印象について、率直な意見をお伺いしました。

●迷路のような街並み

「道が狭く、迷路のように道が入り組んでいるというのが来た当初の印象ですね。今は慣れましたが、始めは、よく道に迷ったり道を間違えたりしました。引っ越して直ぐはそんな感じでしたが、慣れれば良い所も見えてきますね。例えば、観光地へのアクセスの良さですね。
温泉に行くのが好きなのですが、市内にいい温泉がありますし、高速道路のインターチェンジも近いので、ちょっと遠出するのも苦にならないですね。須坂での環境にも慣れてきたのでこれからどんどん出かけていきたいですね」

●温かい人が多いです

また、須坂の人について次のように語ってくれました。「仕事でお宅に訪問させて頂くのですが、その度に、丁寧にもてなして下さり、帰りには果物などのお土産もいただきます。以前はあまりそのようなことがなかったので、須坂に来て初めのうちは、戸惑っていましたが、今は須坂の人の温かさを感じています。また、戴いた須坂のりんごを初めて食べた時は、おいしくてびっくりしました。私は、シナノゴールドという品種のりんごが好きです。須坂に来たら、ぜひりんごも食べて頂きたいですね」

●須坂市の冬の寒さと雪の量

最後に須坂の冬の寒さについて語って頂きました。「これから雪がどの程度降るのかわからないですが、佐久も寒いところなので、寒さは特に気になりませんね」昨年は、12月下旬に一晩で30センチほど積もりましたが、それ以降は大きな雪は降っていません。須坂市のこの時期の平均最低気温はマイナス4度で、朝晩はもっと寒い日もありますが、年間降雪量は30～40センチなので県内北部の中でも雪は少ないです。

井出さん、インタビューへのご協力ありがとうございました。

地域おこし協力隊 松田

古い物を活かした温かみのある手作り靴工房　／　靴工房「クラデアルテ」をオープンさせた柳沢剛司さん

　2012年に須坂市村山で(オーダーメイドで）手作りでクツを作ったり販売する靴工房「クラデアルテ」をオープンさせた柳沢剛司さん。靴工房をオープンさせたきっかけをお聞きしました。

●靴作りをするきっかけ

「レザークラフトが好きだったのと靴が好きだったためその2つを組み合わせて靴を作りたいと思い本格的に学ぶべく、名古屋の靴工房の教室に通いました。靴作りを学ぶうちに面白さに目覚め、最初は、家族の靴や知り合いの靴から作り始めました。それからインターネットで靴を販売するようになり靴工房をオープンしたいという思いが強くなってきました」

●古いものを大切にする理由

柳沢さんがオープンさせた靴工房は築約100年の蔵です。なぜ、蔵で靴工房をオープンさせたのか気になって聞いてみました。
「私は古い物が好きです。土と木で作られている昔からある空間は温かみがあります。その空間を仲間と共有することや古い物を大切にしたいという思いがあり蔵を選びました」
深い。私はそう思いながら聞いていると柳沢さんは手動のコーヒーミルを出し豆を挽きコーヒーを入れてくださいました。手動で挽いていただいた豆で飲むコーヒーは格別な味でした。

●靴作りの可能性、目指すべき目標

「靴が作れるようになると今度はその技術で誰かの役に立ちたいと考えるようになります。オーダーメイドなので、私の夢は足に障害がある方に対して既存品では対応できない靴を作ることです。そして、そのような事に、関われる靴職人も増やしていきたいです」
と語っていただきました。
思いをのせて靴作りに挑む柳沢さん。須坂にそんな思いのある職人さんがたくさん増えれば面白い街になるのではと感じました。柳沢さんインタビューご協力いただきありがとうございました。

靴工房＆手作り靴教室クラデアルテ詳細⇒http://www11.ocn.ne.jp/~kurade/

世代を超えて支持されているお店　食事処かねき　／　オーナーの山口さん

須坂には、世代を超えて支持されているお店がある。今回のインタビューは、須坂駅から徒歩5分にある食事処「かねき」です。洋食レストランとしてオープンして、今年で44年目、2代目オーナーの山口さんは、お店を引き継いで今年で34年目になるそうです。オーナーの山口さんにかねきのお店の歴史や思いについてお伺いしました。

●昔は、オムライスではなく洋食全般を提供していました

「今はオムライスのお店として、市内だけでなく県外からも、わざわざ食べに来て下さるお客様がいますが、当初はオムライスがメインではなくスパゲッティやステーキなどの洋食全般を提供していました。当時は、須坂でも目新しいお店でした。親戚が初代のオーナーだったこともあり、高校生の時はよく遊びに行きキッチンでお店の手伝いなどをしておりまし

た。その後、私は、軽井沢のホテルに就職し働いていたのですが、先代からお店を引き継ぐ話を頂き今に至っております」

●世代を超えて来てくれる喜び

「長いことお店をやっていると、色んな思い出がありますが、子どもの頃、よくお客様として来てくれていた方が、大人になってお子さんを連れて来てくれたり、いつもは県外で働いているけど、年末年始やお盆などの帰省の時期に、必ず立ち寄ってくれたりすると嬉しくなりますね。また、常連のお客様の中には、昔のメニューが食べたいという方もいらっしゃるので、ご注文を頂ければ出来る限り作ってお出しします。昔のメニューが好きでよく食べていたなどのお言葉を頂くと嬉しいですね」

●須坂市の味噌蔵の味噌を使ったメニュー

今は、口コミで、市内、県内外を問わずお客様が訪れるそうで、8割のお客様がオムライスを頼むそうです。また、12年前から地元の味噌を使ったメニューを増やし、7年前からは須坂名物「みそすき丼」も始めたそうです。食事処かねきは、須坂ショッピングセンターという商業施設にあります。駅前の活気が失われ須坂ショッピングセンターもシャッター街に近い状態となっていますが、それでもかねきさんは40年以上に渡って変わらず支持されています。平日は、地元の会社員のお客さんが多いのだそうです。最後に、おすすめしたいメニューをお伺いしました。「食べて頂きたいのは、みそオムライスですね。須坂市内の味噌蔵の味噌を使ったオムライスで、野沢菜も入ってます。味噌も野沢菜も信州を代表する食文化ですので、ぜひ召し上がって頂きたいですね」

山口オーナー、インタビューありがとうございます。

食事処　かねき
須坂市東横町344－1
須坂ショッピングセンターパルム2階駅前通り
11:30～20:00
定休日　火曜日

地域おこし協力隊　松田

No7　主婦目線からの須坂・須坂と都会との違い　／　本郷町出身の黒岩千登勢（ちとせ）さん

　本郷町出身の黒岩千登勢（ちとせ）は、三人のお子さんのお母さんです。須坂の暮らしについてお聞きしました。

●須坂の良いところ

「空気が良く、緑が多いところです。仕事で東京に行き須坂に戻ってくると澄んだ空気や田舎の気持ち良さを感じます。電車も混んでないし、人がゴミゴミしてないところが須坂の良さです。あと、自然は健康にも良いですし須坂はりんごやぶどうなどの果物もおいしいです。都会の方に送ってあげるととても喜びます」

●須坂の悪い所

「大きな企業がないので若い人が就職に困るところです。須坂に戻ってきたい人がいるのに就職するところがあまりないのが残念です。あと須坂駅が閑散としているところです。夜、駅から出ると外は真っ暗です。主婦が気軽にお茶できるカフェなどもあまりありません」

黒岩さんの言う通り須坂は寂しい気もします。大企業が須坂に来て雇用を生み出す様子はいまのところありません。駅前が急にネオン街になるわけでもありません。カフェも急に増えたりしません。そういった状況を踏まえてあるものを活かしどうしたら須坂を魅力的に思ってもらえるのかが地域おこし協力隊として活動している私の課題と感じました。

黒岩さんインタビューご協力いただきありがとうございました。

須坂の暮らしと農業　／　高橋町　北澤弥志(やすし)さん

今回のインタビューは、高橋町にお住いの北澤弥志(やすし)さん(49)です。須坂生まれ須坂育ちで、現在は果樹農家としてぶどうとりんごを栽培されているそうです。

●農業の大変さについて

「農業は天候に左右される仕事のため、そういった意味で大変ですね。丹精込めて育てても、台風でダメになってしまうこともありますからね。また、ぶどうの作業によっては、１日も遅らせられないことがあります。その時は、どんな天気でも畑で作業をしなければ、実の付き具合が悪くなってしまうんです。大変ですけど、自然相手のことなので理解して、共生することが大切ですね」

●お休みは、どんなことをされていますか

「果樹農家は、年間を通して仕事をしていますが、収穫が終われば、あとは剪定作業などで、冬場は、休みも十分に取れます。私は、冬にはインストラクターとして、スキー場で楽しみながら働いています。農家は繁忙期と閑散期がはっきりしています。比較的時間の余裕もあって、都会とは違った時間の流れがあり、四季を感じられるところがいいですね」

●須坂の暮らし

「都会と比べると華やかさや、便利さ、遊ぶ所などはないです。また、近所付き合いも、都会とは違い、地区の行事やお祭りなど、地域の住人同士の関わりを大事にしています。住む地区にもよりますが、須坂市内でも、地域活動が盛んな所やそうでない所はありますね」

北澤さんは、農家として２５年お仕事されており、ぶどうはシャインマスカットやナガノパープルなど5つの品種を栽培し、りんごはふじを栽培しているそうです。直接宅配も行っているそうで、お客様から、美味しかったというお言葉を頂くのが、仕事をする上でなによりの励みになるそうです。北澤さん、インタビューへのご協力ありがとうございました。

地域おこし協力隊 松田

中澤鋳造(ちゅうぞう）所　／　中澤鋳造所の代表取締役、中澤啓明さん

「今朝は冷えましたね。でも本当に山がキレイです」
と答えて頂いたのは中澤鋳造所の代表取締役中澤啓明さん。黄色いタオルを首に巻き作業用のエプロンを着てお仕事中にも関わらずインタビューに協力していただきました。

●鋳造の技術を生かし様々な製品を作っています。
「鋳造とは鉄・アルミ合金・銅を熱源で溶かし鋳型（いがた）に流し込み目的の形状にする加工方法です。中澤鋳造所は鋳造の技術を生かし様々な製品を作っています。最近は3Dデータの加工もできるようになりました。製品は主にタンクローリー用のポンプの部品や試作用自動車
の部品を作っています。5～10年後に発売されるモデルの部品を作るのは楽しいですね」
「過去には、形状記憶合金の須坂市動物園で人気だったボクシングをするカンガルーハッチのお土産も作った事があります。あんまり評判が良くなかったみたいですけどね」
と笑いながら答えてくれました。
私も形状記憶合金のカンガルーハッチを見せて頂きました。リアルすぎて可愛げがないと思った感想でした。笑
どうして作ろうと思ったのかというと同じ製造関係の企業の仲間達で何か面白いおみやげになるものができないかという事で作られたそうです。

●モノづくりの技術を町づくりに生かす。
「放置自転車に電動モーター搭載すれば新しく活用方法にならないか考えた事がありました。法律の問題が複雑でできなかったですけどね」放置自転車に対して挑もうとするところがすごいと感じました。
「小さいころからオーディオ、カメラ、スピーカーなどの部品を買い集めて作っていました。オーディオは音が出なくて難しかったです（笑）そんな遊びをしていると自分で色々と考え工夫します。そういった中で想像力や好奇心を磨くことが仕事にとても役に立っています」

●若い人にモノづくりの素晴らしさを伝えたい。
「モノ作りの良いところは、自分のつくりたいものを作れる能力が身に付くことですね。求人を募集していますが自分で一つの事を成し遂げられる人に来て欲しいです。自分で計画を立て目標に向かえることができるような方です。例えば耕作放棄地を耕し農作物を育て販売する須坂園芸高校の学生です。
この春から開校する須坂創成高校でデュアルシステム（実践的企業実習）の受け入れを今年から行うのですがそのような人材を地域の企業として育てていきたいですね」
自分の想像するものを自分で作れる人はきっと楽しいんだろうなとお話しを聞いて思いました。

●最後に
インタビューのあと工場にお邪魔し作業風景を見学させていただきました。型に土を詰め、プレス機で固め、型を作りそこに溶かした溶解を流し込み固まったら土を壊し製品を取り出して完成です。

「簡単にいえば鯛焼きを焼くのと一緒の要領です（笑）原始的な方法が一番早いんですよ。難しいモノであるほど完成した時の喜びがあります」
奥が深そうな世界。でも面白そうな世界。創意工夫することができ好奇心旺盛な方にはぴったりな会社だと感じました。

中澤鋳造所ＨＰ
http://www.nakazawa-f.co.jp/company/index.html

紹介動画
https://www.youtube.com/watch?v=ZCz8w6cCPgw

採用情報
http://www.nakazawa-f.co.jp/saiyou/index.html

インターンや職場体験なども受付されているとのことで
したのでご希望の方はご相談ください。
⇒有限会社 中澤鋳造所 026-245-2052

ブログで写真などが掲載しています。
http://blog.suzaka.jp/ijushien/2015/02/05/p28433

地域と暮らし　／　高橋町にお住まいの山部昌美さん

　高橋町にお住まいの山部昌美は、3人のお子さんのお母さんです。須坂の暮らしについて聞いてみました。

●地域で子育てする安心感

「夫の転勤で須坂に移住しました。私の住んでいる高橋町は地域の集まりが多く、ちょっと大変だったりしますが子育ての面からしてみれば地域の方の顔が見えて安心して子育てができます」

●近所の農家さんで仕事をする楽しさ

「須坂に住んで新鮮だったのは、近所の農家さんのお手伝いの仕事をさせてもらったときです。太陽の下で農作業したり一緒に働いている方と休憩の時にお茶を飲みながら色々とお話しするのは楽しかったです。自分の畑ではないですけど自分が手伝ったブドウがすくすくと育つ姿をみるのは、嬉しいですね」

●地域とのつながり

「夏になると近所の方達とバーベキューをしたります。あとお母さん友達の家に集まりみなさんでお茶をしたりします。須坂は飲食店が少なく、集まる場所は少ないですが地域で協力し助け合って暮らしています。小布施や長野に比べれば何もありませんが、何もないからこそ静かに暮らせる場所です」

●最後に

都会には少ない須坂ならではのゆっくりした時間を使い家族や地域の方と過ごすことは須坂ならではの贅沢なのではないかと気づかされました。山部さんインタビューご協力いただきありがとうございました。
（地域おこし協力隊 和田）

No8　地域と調和を目指すイタリア料理店「il vico」（イル ヴィーコ）　／オーナーの土屋さん

蔵造りの建物が残る大笹街道は、かつて物資を輸送する道路として、多くの人々が行き交っていました。また、街道をつなぐ小路の一つである大門通りは、生活必需品を買いに来た人でいつも賑わい、地域の暮らしに溶け込んでいました。現在は、その通りも、住宅街となっていますが、当時の面影は、今でも残っており、通りを歩けば、風情を感じることが出来ます。

イタリア料理のお店「il vico」（イル ヴィーコ）の土屋オーナーは、料理学校で学んだ後、東京、軽井沢のレストランでシェフを経験し、2012年5月に大門通りにお店をオープンしました。細い小路に、隠れ家のように佇んでおり、店内の雰囲気は、オーナーの土屋さんご夫婦の飾らない人柄を、そのまま表しています。オープンの経緯や須坂の暮らしについて土屋さんにお伺いしました。

●地域の方に支持される落ち着いたお店

「いつか自分のお店を持ちたいと思っており、東京や軽井沢のお店で仕事をしていました。軽井沢では繁忙期になるととても忙しく、調理も機械的で、仕事が終わると、達成感というより疲労感で一杯でした。充実の中にも何か疑問のようなものを感じており、これが自分のしたいことなのかなと思ったんです。その中で、自分のお店は、地域の方に長く支持されるような落ち着きのあるお店を作っていきたいと思ったんです。このお店の場所は、20年程空き家だったんですが、メイン通りから離れており、住宅街という立地で、自分の希望と合っていました。また、夫婦2人で切り盛りするにはちょうど良い広さだったのも決め手です。食材は出来る限り地元産、信州産のものを使うようこだわっており、野菜などは両親や親戚に栽培してもらっています」

●暮らしを大切にする町

「お店をやると決めた時、須坂を良く知る人たちからは、須坂での開業は難しいよとアドバイスを頂きました。というのも、須坂では、外食をする文化が余り無いようで、多くの家庭が、家で作って食べるそうなんです。須坂市内にスーパーが多いのは、そういった理由があるからだそうです。観光地ではなく、日常の暮らしを大切にしている文化風土が根付いているということなんだと思いました。私自身、地元の方に支持されるお店づくりをしていきたいという思いがあったので、そういった須坂の文化こそ、自分の思い描いているものと似ていると感じました。ですので、開業する際に、特に心配することはありませんでした」

●須坂の魅力

「須坂には、若者や家族で遊べるところが少なくてさびしい、という意見があります。私はボウリングが好きなのですが、ボウリング場も長野市に行かないと無いですし、映画館も無くなってしまいました。買い物も、上田や軽井沢、もうじきリニューアルされる長野駅前に行かないと、若者向けのお店は少ないと感じている方がいるようです。逆転の発想かもしれませんが、日常の暮らしを大切にしているから、嗜好品やアミューズメント施設も少ないんだと思います。実はそこが須坂の魅力なのかも知れないですね」

土屋さんインタビューありがとうございます。須坂の小路巡りに出掛けた際は、il vicoさんのお店で、地元産の食材を使用したイタリアンを召し上がって須坂市を感じてみませんか。

il vico
須坂市本上町43－1
Tel:026-214-5148
11：30～14：00
18：00～22：00
定休日火曜日

地域おこし協力隊 松田

須坂のアクティブシニア　／　北旭ヶ丘町　目黒昭伸さん

北旭ヶ丘町にお住いの目黒昭伸さん(71)は、長野市で生まれて、結婚を機に勤務先だった須坂に移住。現在は25年以上続いているダンススポーツを教えながら、ご自身も競技に参加しており、アクティブに活動されています。そんな目黒さんに須坂市の良い所について聞いてみました。

●安定している須坂の気候

「須坂は、台風などの天災が少なく、気候が安定していて過ごしやすく、野菜や果物などの食べ物もおいしいのがいいですね。だから住み続けられるんだと思います」須坂の土壌は水はけがいいため、果物の甘みが強くなるんだそうです。

●大きな体育館やグラウンドでスポーツ振興

「プロスポーツチームの試合や、国体などの大規模な大会を開催できる体育館やグラウンドがあるといいですね。第一線で活躍している選手のプレーを見れるって、子どもたちにとって大切だと思います。須坂市は、メセナホールなどの文化施設が充実しているので、大きなコンサートなどは開けるのですが、市内の体育館やグラウンドは、観覧席が少ないですからね。体育施設が充実することで、須坂から有名なスポーツ選手が輩出されるといいですね」

ダンススポーツという競技は、現在国際オリンピック委員会に加盟しているそうです。正式種目になれば、2020年の東京オリンピックで、目黒さんのサークルから選手が出場し、踊っている姿を見ることができるかもしれません。目黒さんインタビューありがとうございます。

地域おこし協力隊　松田

No9　Uターンして感じる須坂　／　春木町　関根清美さん

須坂生まれ須坂育ち。春木町にお住いの関根清美さんは、学生時代を東京で過ごし、Uターンで須坂の会社に就職。そんな関根さんに須坂の良い所、悪い所について語って頂きました。

●自然が近くて、人が温かいです

「学生時代は、東京でも比較的田舎の方に住んでいたので、山や自然はありました。ですが、夜中にパトカーや救急車のサイレンの音が聞こえて、落ち着くことが出来なかったです。また、隣近所との関わりもなかったので物騒だなと感じることもありました。その点須坂は、知らない人同士でも挨拶するし、隣近所でも声を掛け合ったりするので、見守られているようで、落ち着きますね。子どもの頃は、当たり前の光景だったけれど、帰ってきて、その居心地の良さに改めて気付きました」やっぱり地元が落ち着くと語る関根さん。

●若い人向けのお店が増えてほしいです

「私が小学生の頃は、駅前も今よりは若い人向けのお店があったのですが、今はお店自体が少ないです。また閉店時間も早いので、友達と気軽にお茶出来るお店も市内には少ないです。長野駅の駅ビルが新しくなり、須坂駅も長野駅までとは言わないけれど、もうちょっと若い人向けのレストランやカフェ、雑貨屋さんや洋服屋さんなどのお店が増えてくれるといいですね」長野市まで車で行くのは時間がかかるので、市内にカフェなどのお店が欲しいという意見も実際にあるようですね。

●須坂のおすすめ

「おすすめの場所は臥龍公園です。満開の時期には桜がライトアップされ、桜の花が池の水面に映りとてもきれいです。また周辺にはおでん屋さんがあるので、おでんを食べながらお花見をしてほしいです。あと、須坂に来たら食べて頂きたいお店があります。かねきというオムライスが美味しいお店です。須坂駅の近くなのですが、ボリュームと味が特徴で、中でも味噌オムライスがおすすめです。普通サイズは大きいので女性はミニサイズがちょうどいいと思います」

関根さん、インタビューへのご協力ありがとうございました。

地域おこし協力隊　松田

No10　暮らすと分かる須坂の便利さ　／　高橋町　山岸さん

今回のインタビューは高橋町にお住いの山岸幸村さん(39)です。ご出身は、山ノ内町だそうで、須坂園芸高校に通っていたという山岸さん。結婚を機に、須坂に移り住んで16年になるそうです。須坂の暮らしや日々感じることをお聞きしました。

●須坂の暮らしで感じること

「須坂は便利だと感じますね。電車は1時間に数本走ってますし、バスもあります。地方に行けば電車が1時間に1本で、バスが無い所もあります。それに比べるとインフラに関しては十分だと思います。また、須坂の人は、人情味がありますね。仕事で関東に行くことがあり

ますが、挨拶をしても返事をしてくれる方は少ないです。その点須坂の人は、皆さん挨拶してくれるので嬉しいです。さらに、須坂市は、地域の団結力もあります。消防団に入っているのですが、消防ラッパ隊は県大会で出場10連覇を遂げるほど熱心に活動しています。私も消防団のお陰で色んな方と知り合いになりました」

●思い出の場所

「駅前通りにある須坂ショッピングセンターやフジ会館は、私の若い頃は活気があり、学校の放課後に友だちとよく遊んだ場所です。今でも当時からやっているお店が営業していますが、シャッターの閉まっているお店が増えて寂しいですね。フジ会館というお店は閉店してしまいました。少しずつ思い出の場所が無くなっていますが、また活気づいて欲しいですね」

●農業の全体の活性化

「須坂は、果樹農家さんが多いので、果樹農業に力が入っていますが、果樹に限らず農業全般にもっと力が入ればいいなと感じます。須坂は元々、牛を飼う農家が多かった地域です。今はほとんどいませんが、放牧して観光産業として活用できれば地域がもっと活気づいていいですね。また、堆肥などを農業に利用し、循環できれば相乗効果で更にいいですね」

●須坂の良さを感じてほしい

「須坂は城下町でもあり、明治以降、製糸業で栄えた町です。歴史に裏打ちされた確かな文化があります。また、臥竜公園の桜や峰の原高原や五味池破風高原など、景色がきれいで自然豊かな所もあります。良さは言葉では表現しきれないので、4月に臥竜公園の桜並木を見に、須坂まで足を運んでほしいです」

山岸さんのおすすめのお店は、蔵四季さんだそうです。面白いおばちゃんと、安くておいしい料理が最高だそうです。須坂の地酒もあるそうですよ。

蔵四季さんのHP↓
http://www5.wind.ne.jp/kurashiki/

山岸さん、インタビューへのご協力有り難う御座います。

地域おこし協力隊　松田

No11　ペンションの暮らし　／　うどのペンション　鵜殿さんオーナーご夫婦

峰の原高原スキー場のリフト頂上から徒歩5分。 峰の原高原の第1ペンションエリアにある「うどのペンション」は 1976年にオープンし、あと数年で40周年を迎える老舗のペンショ

ンです。オーナーの鵜殿さんご夫婦は、東京からのIターン移住者。ペンション経営や移住者として感じる峰の原の暮らしについてお伺いしました。

●脱サラ・脱東京を経てペンションオーナーへ

「新橋でサラリーマンとして15年近く働いていたのですが、 30歳を過ぎ、会社の同期もみなマイホームを建て始めた頃、夫婦でマイホームの話をしたんです。自分もそろそろかぁと思いました。しかしマイホームを建てることは、私にとって大きな出来事でした。なぜなら私自身、東京での生活に疑問を持ち始めており、サラリーマンとしての生活に個人的に行き詰まりも感じてもいました。1970年代当時の東京は、環境汚染、過密と地価の高騰の始まりなどもあり、住環境的には悪化しつつあったと思います。仕事も週6で満員電車に揺られて朝早くから夜遅くまで仕事をしていました。それでも、日本経済は上向いていたので、東京には活気があり、それなりに経済的な豊かさも感じていました。このままマイホームを建て、今の生活を続ければ将来の生活は保障されていました。ですが同時に本当にそれが豊かな生活なのかを疑問に感じていました。すぐに結論が出た訳ではないですが、東京に家を建てるか、そうでない暮らしを選ぶか、マイホーム建築の話を機に、自分たちにとってどちらがいいか考えることにしたんです。そんな時、妻が友達とペンションに遊びに行ってきて、私にペンションのことについて色々話をしてくれました。ペンション経営もいいなぁと、その時は半分冗談で話をしていました。その後、ペンションに二人で泊まりに行った時、オーナーと色々話をしたんですが、自然豊かなで、しかも自分たちが住んでいる場所で仕事が出来るペンション経営っていいなと思ったんです。当時のペンションは、お客様同志の交流があり、若者や家族連れにとても人気がありました。また開業するにも専門的な知識はさほど必要ではなかったので、開業しやすいという面もありましたね。その後、お互い働きながら、夫婦でペンション経営について情報収集を行いました。原村や斑尾高原、峰の原のペンションオーナーの話も聞きました。開業の決め手は、峰の原高原の景色ですね。都会では見ることが出来ない景色が一面に広がっており、ここしかないと思いましたね。寒いところとは聞いていましたが、若いころはしょっちゅうスキーに行っていたので、さほど気にならなかったです。後はもう勢いでした。両親には凄い反対されましたよ。なんたって安定した生活を捨てていくんですからね。でも、夫婦で決めたことなので、怖いものはなかったですね」

●大変だけど楽しい生活

「ペンションには色々なお客様が宿泊に訪れます。ホテルと違いオーナーが接客するので、お客様との距離も近く、会社勤めでは関わることの無かった方々と交流ができるのがペンション経営の一つの魅力ですね。常連のお客様とは何十年とお付き合いがあり、世代を超えてお付き合いのあるお客様もいらっしゃいます。また、ペンションは繁忙期と閑散期があります。オーナーの経営次第では、サラリーマン時代では取れない位の長期休みを取ることもできます。大変な所は、館内の清掃、ペンキ塗りなどの日々の掃除やメンテナンスです。冬の寒さで水道管が破裂することも稀にあります。おかげさまで、大工仕事は一通り出来る様になりましたよ」

●都会では味わえない体験が日常で味わえる

「新鮮な空気や冷たくておいしい水が毎日飲めることや、星がきれいだったり、太陽がさんさんと当たったり、北アルプスが一望できたりと、都会では味わえない体験が日常で味わえる所ですね。また都会の喧騒が一切なく、木々が揺れたり、野生動物がペンションを横切ったりするくらいで、ここはとても静かです。そういった意味で、経済的な豊かさではなく、お金で買えない豊かさが峰の原の暮らしにはありますね。子供を思いっきり遊ばせても大丈夫です。子育てには最高の場所だと思いますよ。ただ良いとこばかりではないですよ。東京

と比べれば、峰の原高原の冬の寒さはとても厳しいです。積雪が1メートル以上あり、寒い時期はマイナス20度にもなります。ちゃんと対応策を講じていないと、水道管が凍ってしまうくらい寒いですね。冬の寒さに絶えられる体力と精神力も必要です。もちろん、スキー、ボードを楽しむこともできます」

● お客様第一のおもてなし

「一般的にペンションは低廉で清潔感があり、家族的なおもてなしを経営理念としています。私たちも開業以来ずっとその理念を守っております。それは、特別なサービスがあるわけではなく、きれいなペンションを保ち続けるということと、気遣いや気配りなど、お客様との距離感を大切にし、お客様第一を心掛けるということだと思います」

●自然が好きで元気と笑顔があればいい

「自然豊かな所が好きで、笑顔と元気があれば誰でもできると思いますよ。あえて挙げるなら、お客様に合わせてサービスの内容を変えられる柔軟性や、毎日の掃除やベッドメイクなどをちゃんと手を抜かずにできる人ですね。あとは、冬の寒さが気にならないという方。もちろんペンションは一人では切り盛りできないのでご夫婦かカップルが最低条件ですね」

うどのペンション

長野県須坂市仁礼3153－700

http://www.h3.dion.ne.jp/~udono-p/index.htm

No12　峰の原高原に移住して　／　山の宿木まま　綱木さんオーナーご夫婦

峰の原高原の第2ペンションエリアにある「山の宿　木まま」の綱木オーナーご夫婦がペンションをオープンしたのは平成4年2月のこと。オーナー主人の綱木さんは、学生の時に宿泊したペンションオーナーの生き方に憧れ、その夢を忘れることが出来ず、奥さんと3人のお子さんを連れ、脱サラ。峰の原でペンション業を始めたそうです。経営の経緯や峰の原での暮らし、ペンション経営についてお伺いしました。

●ペンションとの出会い

「今から40年前に、全国的にペンションが出来始めたんですが、知り合いからペンションの話を聞いておりました。当時私は学生で、色々な生き方を見てみたいという思いもあり、興味本位で裏磐梯のペンションに泊まったんです。その時に泊まったペンションの居心地やスタッフの方の対応がとても良かったんですよ。その時の印象が忘れられず、それから常連客として宿泊していました。当時は、夕食後にリビングで他のお客さんとも交流し、色んな人との出会いがあり、それもペンションの魅力でした。心地よい空間を演出し、人とのつながりを作れる場所であるペンションをいつか自分もしてみたいと、学生ながら思うようになりました。しかし、自己資金もなく、夢は夢のままで心の奥に留め、卒業後は企業に就職したんです。ですが、忘れられなかったみたいです」

●峰の原での出会い

「30代の半ばに差し掛かり、家庭も仕事も順調でした。ペンションのことも忘れていたはずだったのですが、家族で旅行に行くようになり、学生の頃の夢が沸々と甦ってきたんです。それから、自分でも物件を探し始め、色んなところを見て回りました。3年かけて全国を探し回り、出会ったのが、峰の原高原の空きペンションでした。建物は2年間程空き家になっており、窓ガラスは割れ、建物の中も荒れていました。ですが、建物に呼ばれているような気がしたんです。そこからは、勢いでした。平成3年の12月に会社を辞め2月のオープンに向け、慌ただしく準備をしました。しかし、冬の峰の原高原は積雪が1メートルにもなり気温はマイナス20℃。辺りは雪だらけでしたが、業者さんに無理にお願いして、工事を進めてもらいました。私は朝から晩まで雪かきをしていた覚えがあります。峰の原の冬の厳しさを知らずに乗り込み、いきなり洗礼を浴びましたね」

●ペンション経営

「ペンションブームは、私が開業した当初から徐々に下がっていました。それでも、当時は生活していくため様々な工夫を凝らし、副業もしました。10年前には峰の原高原にクロスカントリーコースが整備され、中高生や大学生、実業団の陸上合宿の団体が峰の原高原で高地トレーニングを行うようになりました。それにより、今までのお客様は、観光、避暑やウィンタースポーツがメインだったのですが、そこに新しい人の流れが加わり、ペンションの営業も多様化しました。私は、陸上合宿などの団体の受け入れを積極的に行っております。合宿に来た子供たちは元気よく、トレーニングの時の真剣な眼差しや、はしゃいでいる時の笑顔を見ると、私自身力も元気になります。また、私も子供たちの力になれるため嬉しいです。当初、思い描いていたペンション経営とは違いますが、ペンションの経営手法も多様化していいと思いますし、私自身もやりがいを感じています」

●子育て

「峰の原高原の子供たちは、みなスキーが出来ます。それは、菅平小・中学校の授業にスキー科目があるからです。スキーをするのが当たりまえの環境ですので、自然と上手になるんだと思います。峰の原高原に来た当初は、子供たちも滑れませんでしたが、今では私より上手です。また、子供たちも、宿泊のお客様に可愛がっていただき、幼いうちから色んな世界を知ることが出来ます。ペンションは、色んなお客様が訪れるので、子供の視野を広げる意味で、子育てにも良いかもしれません。ただ、遊びたい盛りでも、忙しい時は、子供たちにも宿を手伝ってもらっていましたね」

●峰の原という地域

「峰の原高原は、ペンションと別荘以外にも住宅として住んでいる人もおられます。ですが、ここに住んでいる人は峰の原の景観の良さを感じて移住していますので、建物には統一感があり、エリアとして景観が整っております。そして、周辺にペンション業以外のお店が一軒も無いのが特徴です。宿泊業だけにとらわれず、更に違ったアプローチから峰の原で業を起こせる方でしたら、峰の原での暮らしは、十分に可能性があります。ただ、須坂市同様に峰の原高原は都心での知名度が低く、知る人ぞ知る地域に留まっているのが現状です。ですが知っていただく機会さえあれば、アクセスも良く、様々な可能性を感じます。実際に来てその可能性を感じてほしいです」

山の宿　木まま

長野県須坂市仁礼峰の原3153-729

http://yamano-yado-kimama.com/

No13　ロッジ・ペンションオーナーという生き方　／　ぼっけ山荘　大倉さんオーナーご夫婦

峰の原高原スキー場へ向かう道から別荘のある山林に入ると、ポツンと一軒のロッジがあります。「ぼっけ山荘」はオープンして25年目のロッジ。東京生まれ東京育ちの大倉オーナーは、前のオーナーから引き継いで、ロッジを始められたそうです。経営の経緯や峰の原での暮らし、経営についてお伺いしました。

●常連客からオーナーへ

「このロッジには、サラリーマン時代に15年近く常連客として通っていました。夏と秋と冬に遊びに行き、夏はテニス、秋はきのこ採り、冬はスキーをしていました。そんな中、いつか自分も脱サラをして、ロッジやペンションをしたいと思うようになりました。根っからの東京育ちで、山への憧れもあったからだと思います。当初は峰の原ではなく、白馬や那須高原、裏磐梯などのロッジやペンションを調べていました。ですが、なかなか思った物件が見付からず、そんなことを前のここのオーナーと話していたら、偶然オーナーもロッジを売ろうと考えているということだったので、思い切って、そのまま引き継ぐことにしたんです」

●宿泊業5割　副業5割の生活

「ペンションやロッジの経営は繁忙期と閑散期がはっきりしています。長期休みをとってゆっくり過ごす人もいれば、遊びに行く人もいます。期間がはっきりしているので、副業などもしやすいです。ペンションやロッジも、ブームの時と比べると、繁忙期の収入だけでは、生活に必要な売り上げを稼ぐことが難しくなってきています。時代に合った経営の手法が必要なように、ペンションやロッジの経営も、ただお客様を泊めるだけではなく、経営手法を工夫する必要があります。例えば、繁忙期や閑散期に限らず、在宅でできるIT関係の仕事、芸術家のアトリエ兼画廊、喫茶店、レストラン、ケータリング、仕出しなど、考えればその可能性は多岐に渡ると思います。私たち夫婦も現在副業をしながらロッジを営んでいます。専門技術や手に職のある方で、縛られない、自由な時間の使い方を求める方ならば、ペンションやロッジの暮らしは向いていると思います」

●峰の原高原での暮らし

「暮らしの中で大変なのは、冬の寒さと雪ですね。初めは、除雪機が無かったので、雪かきも1日2時間はやっていました。今は除雪機があるので、雪かきは大して問題ではないですね。寒さは、とても厳しい場所ですが、慣れました。また暮らしにおいて、峰の原高原は、子育てには最適な場所だと思います。峰の原高原から車で10分の所に保育園、小中学校があります。そして、何と言っても自然環境がいいですね。都会では味わえない、非日常体験が日常で味わえるんです。一方で、病院やスーパーなどは、麓の須坂市か上田市の市街地まで車で30分ほど下らないと無いという不便さももちろんあります。ですが、田舎暮らしには、どこか不便さがつきものだと思います。それを踏まえても余りある魅力が、峰の原高原にはあります。何より、時間に縛られず過ごせることが、ここでの生活の良さだと思います」

●出会いを楽しめる人

「ペンションやロッジは様々な方が宿泊される宿で、オーナーとの距離がホテルや旅館と違い、とても近いです。食後にはお客様と色んな話をしますが、サラリーマン時代には出会えなかったような方と話をすることがあります。そういった方との出会いが、経営の魅力ですね。副業をされている方にとっては、刺激にもなると思います」

●ペンションやロッジの経営とは

「ペンションやロッジは、サービスや料理だけでなく、オーナーの人柄が、その宿の個性を決めます。ですので、キャラクターはとても大切ですね。そういった意味で、オーナーは社交的で、人との出会いを楽しむことが出来る方で、細かい気配りが出来る人が良いと思います。個性的であれば、更に良いと思います。また、ペンションやロッジは、一人ではできませんので、夫婦若しくはカップルが最低条件ですね。そして、何と言っても、峰の原に魅力を感じ、暮らしを楽しめる方がいいですね」

ぼっけ山荘

長野県須坂市仁礼3153－324

No14　ペンション経営の魅力　／　ひらたペンション　平田さんオーナーご夫婦

峰の原高原の第1ペンションエリアは峰の原高原スキー場と同じ位置に面しており、ゲレンデまですぐ行けるのが特徴のエリア。ひらたペンションのオーナー、平田さんご家族は、親子2代でペンション経営をされております。昭和51年の7月にオープンして、もうじき40年。峰の原のことなら何でも知っているオーナーです。峰の原への移住の経緯や、ペンション経営についてお伺いしました。

●都会での暮らし

「若い頃は、大阪でお店を経営しておりました。今でもそうですが、大阪は商売の激戦区でしたので、毎日休みなく、働いており、唯一休めたのが、年越しでした。スキーが大好きだった私は、年越しには、家族を連れてスキー場で過ごしておりました。スキー場は、シーズンになると連日満員で、とても賑わっておりました。当時は、スキーブーム真っ只中で、リフトも1時間待ちは当たり前の時代でした。賑わいがあるスキー場に、楽しそうに宿のオーナーが働き、お客さんも大好きなスキーを楽しんでおり、その様子を見ていると、次第に大阪の激戦区で、心も体も消耗しながら、仕事や子育てに明け暮れている自分の働き方について疑問が沸いてきたのです。特に、子育ての面で、もっと環境の良い所で子育てをしたいという思いがありました。その後、宿泊業について調べるため全国のスキー場を訪れ、宿に泊まり、情報収集を行いました」

●全てを捨て峰の原高原へ

「情報収集をするうちに、知識も深まり、宿泊業への気持ちはどんどん高まっていきました。あとはタイミングだけでした。そんなある日、長野県が保健休養地開発する、峰の原高原のことを知ったのです。私は、その情報を得た瞬間に、これしかないと思い、次の日には須坂市に出向き、分譲地を見に行きました。スキー場からも近く、周辺にはテニスコートも

あり、これならスキーに限らず、年間を通して、宿泊業として生計を立てられると思い、その日のうちに、スキー場から一番近い場所を決めました。大阪に戻り、親戚や取引先の方にペンションをするんだと言うと、何を考えているんだと言われました。当時は、ペンションなんてまだ世間一般に浸透しておらず、まして、私自身の事業も、2店舗に拡大し、マイホームも建てたばかりだったのですから。ですが、大阪にあるもの全てを捨ててでも、峰の原でのペンション経営に、商機と豊かな暮らしの実現の可能性を感じており、既に大阪で商売を続ける気持ちも薄らいでいました」

●峰の原高原の暮らしとペンション経営

「私は、生まれが広島県の豪雪地帯だったので、雪やインフラの問題は全く気にしておりませんでした。田舎で育ったからこそ、田舎の良さを知っておりましたし、そのことを子供たちにも伝えたかったので、同じ環境で子育てできて良かったです。むしろ、雪の少ない年は、もっと降ってくれと、神頼みするほどでした。ペンションは夫婦二人で力を合わせて切り盛りしておりました。幸い、大阪時代から夫婦二人でお店を経営しておりましたので、開業前から二人の連携はバッチリでした。私たちの宿は、おいしい料理、そして暖かく、広い食堂と、また宿泊したくなるサービスを常に心掛けております。お客様が御一人でも、大人数でも、同じサービスと気遣い、心配りをしております。それも、大阪時代に培ったものだと思います。大変でしたが、大阪で、若くから夫婦二人で苦労をしてきたことは、貴重な経験だったと思います。若いうちの苦労は買ってでもしろとは、正にその通りだと思います」

●ペンション経営の魅力

「大阪時代は、お客様とゆっくり話をすることも出来ず、薄利多売の商売で、お客様との心の交流が無く、満たされない気持ちでした。ペンション業は、お客様とゆっくり話をすることが出来、お客様と深く繋がることが出来ます。常連のお客様は、もう何十年と通ってくださっており、お嫁さんや息子さん、そしてお孫さんを連れて来てくれるんです。私は、嬉しくて思わず抱き締めてしまいます。身内でもない自分に、家族を見せたいからと言って、うちのペンションに来て下さるなんて、こんな嬉しいことは無いですね。お客様とのかけがえのない絆が生まれ、家族を越えて繋がれるのは、ペンションの最大の魅力だと思います。子供たちもお客様にとても可愛がっていただきました」

●是非、ペンション経営の楽しさを感じに来て下さい

「ペンション経営は、地の利だけでは経営できません。やはり、ペンションのサービスやオーナー家族の人柄が一番大切だと思います。40年近く続けて来て、ペンション経営はますます楽しくなってきております。お客様との絆が、年を増すごとに強くなり、大阪にいては、決して感じることのできない不思議な感覚を感じております。これからペンションオーナーをやりたいという方も、年齢によって経営方法は違ってくると思います。私の経験をお話しできればと思います」

ひらた　ペンション

長野県須坂市仁礼峰の原581

http://www3.ocn.ne.jp/~hirata/

No15　ペンション経営と子育て　／　あすなろペンションpocket　湯沢さんオーナーご夫婦

東京生まれ東京育ちの湯沢オーナーご夫婦は、山での暮らしに憧れ、峰の原高原に移住。昭和52年に開業し、30年以上峰の原で暮らしています。あすなろペンションPOCKETの建つ第二ヴィレッジは第一ヴィレッジとは、また趣の違ったペンションが立ち並ぶエリアです。ペンション経営の経緯や峰の原高原での暮らし、子育てについてお伺いしました。

●山での暮らしに憧れてペンション経営へ

「子供のころから山が好きで、良く山登りに出かけていました。また、若い頃から自営業で独立することも考えていました。5年ほどの会社勤めの後、20代の後半になり、やっぱり山に暮らしたいと思い移住・結婚を決意しました。漠然とした夢は、しゃれた山小屋だったのですが、山小屋は、よそ者がすぐにできるようなものでもなく、またその仕事も、昔はとんでもない重労働だったため諦めました。しかし、当時の民宿経営は、自分たちには馴染まず、かと言って、ホテルでは経営規模が大きく、資金もない素人の私たち夫婦には無理でした。そんな時、ペンションを知ったのです。山間部にあり、山小屋風の外観で、中は西洋風の内装とインテリアになっており、個人で開業できるため、夫婦でやるには丁度いいと思いました。民宿と違い、部屋が個室のベッドになっているのも、当時としては新鮮でした」

●天気の良さと見晴らしが気に入り峰の原へ

「その後、各地のペンションを泊まりながらペンション用地を見て回りました。県内は白馬、斑尾高原、原村、峰の原高原を訪れ、他にも山形県側の蔵王や福島県の裏磐梯にも行きました。峰の原高原には3回訪れたのですが、峰の原高原にした決め手は、訪れた時の天気でした。3回とも快晴で、とても景色が良かったんです。呼ばれている様な気がしました。当時は、周辺の木が低く、北アルプス全山が綺麗に見えたんです。それに峰の原高原には、スキー場、テニスコート、ゴルフ場が周辺にあり、他のペンションヴィレッジと比較して、環境的に静かな上、営業的にも恵まれていた、というのも決め手の一つですね」

●家と職場が一緒にあるので切り替えが肝心

「ペンションは家と職場が同じ場所にあり、同僚は家族になります。そのため、気を付けないと仕事とプライベートが一緒になってしまいます。お客様に迷惑を掛けないように、夫婦関係も家族関係もペンションが営業中は、仕事モードに切り替えないといけません。また、子どもたちも、お客様の居る前で走ったり、騒いだりしないように、営業中はルールを守ってもらいます。また、ペンション業は、年間の過ごし方をすべて自分たちで決めなければいけません。それは、自分なりの時間の使い方が出来るということですが、そういった生き方に価値を感じる人でなければ、ここでの生活は逆に大変かもしれません」

●楽しんでペンションの手伝いをしていた

「私たちの子どもたちも、小さいころから、仕事を手伝っていました。秋の落ち葉はきは、一緒に焼き芋をしたり、冬の雪かきでは、その後かまくらを作って遊んでいました。ペンションの仕事自体が子どもたちにとっては、遊びの様なものも多かったので良かったです。また、見よう見まねで、サラダの盛り付けなども進んで手伝うようになり、自分の役目だと言って、上手に盛り付けていました。宿泊業で多くの人に接することから、挨拶も出来るようになり、敬語も使えて、それは子育てで良かったことの一つです」

●ペンションオーナーになるということ

「ペンションの多くは、夫婦で仕事を分担して行います。そして、一日の仕事で一番ウエイトを占めるのは食事です。そういった意味で、調理を担当するオーナー夫人の負担は大きいです。ペンションによっては、男性が料理を担当することもありますし、いろいろですが、お互いの同意があって初めてできるものだと思います。仕事については、事前に良く知っておくことが大切だと思います」

あすなろ　ペンション　Pocket

長野県須坂市仁礼峰の原高原3153-725

http://asunarop.server-shared.com/index.html

No16　憧れの高原での生活　／　ペンションあるぷ　木村さんオーナーご夫婦

ペンションあるぷの木村さんオーナーご夫婦は、信州の山が好きで、少しでも山の近くで暮らしたいという思いから脱サラをし、30年前に3人のお子さんを連れて峰の原高原に移住して来ました。ペンション名は、山腹にある牧場という意味のＡＬＰ(アルプ)に因んだそうで、根子岳山腹の峰の原高原にぴったりの名前だと思い、オーナーが考えたのだそうです。ペンション経営の経緯や峰の原高原での暮らし、子育てについてお伺いしました。

●山が好きで、山の近くで暮らしたかった

「山登りは、社会人になってから始めました。山岳会に所属し、色んな山に登りました。その中でも信州の山は特に魅力的で、北アルプス、南アルプス、八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳など、信州にある山は、殆ど登りました。縦走したり冬山も登りしました。危険な山にも登りました。東京生まれの私にとって、大自然の景色や、山が目の前にある日常には、憧れがありました。ふるさと回帰ではないですが、特に、山が好きな私にとっては、いつかは信州で暮らしたいという思いは、ごく自然だったと思います」

●銀行マンから脱サラし、ペンションオーナーへ

「東京で結婚をし、３人の子宝に恵まれ、マイホームも建てました。家を建てる時、まさか自分が峰の原高原に移住をするなんて思ってもいませんでした。転機は、峰の原高原のペンション分譲地のことを知ったことです。当時私は、銀行に勤めており、それなりの役職も授かっておりました。峰の原に訪れて、ピンク色に染まる北アルプスの景色を見たときに、感動して、ここでペンションをするぞと決めたんです。その時は、先のことは考えられませんでした。それほど私にとって忘れられない景色でした。お世話になった会社に、迷惑は掛けたくなかったので、事情を説明し、引き継ぎをしっかり行い退職しました」

●ペンション経営と子育て

「妻と3人の子供を連れて、右も左もわからない中でのペンション開業でした。昭和59年にオープンし、それからは、毎日バタバタと仕事をしておりました。折しも、ペンションブー

ムの時でしたので、お客様には恵まれておりました。子供たちも自主的に仕事を手伝ってくれました。学校から戻ると直ぐ、自分からベッドメイクを手伝ってくれるんですが、私より早く出来てしまうものですから、よく子供たちには、お父さん遅いと怒られましたよ。子供たちは、ペンションの仕事も含めて、峰の原での生活を楽しんでいる様子でした。高校進学と共に、上田市内で下宿生活となりましたが、ペンションでの経験のお陰か、下宿生活も直ぐに慣れ、思えば、親離れは早かったように感じます」

●峰の原高原のペンションオーナーとの関わり

「峰の原高原に来た当初から、周辺のオーナーとの関わりがありました。峰の原高原は、観光地であり、殆どがペンションオーナーですので、イベントごとにオーナーが集まるんです。私たちも、イベントや景観整備に参加し、そこから徐々に先輩オーナーと親しくお付き合いさせて頂くようになりました。ペンション同士で、お子さんの通学なども交代で助け合っていました。同じ移住者で、ペンションオーナーだからこそ、お互いの仕事や生活の大変さもわかるんだと思います。ですので、ご近所同士の関わりに煩わしさを感じる方は、ここでの暮らしは大変だと思います。ですが、同じ移住者同士ですので、田舎とは違う距離感が、私は心地よく感じます」

●峰の原高原の四季折々の景色を感じてほしい

「ペンションあるぷは、第二ヴィレッジにあり、2階からは、北アルプスが綺麗に見えます。斜面の上にあり、手前には道があるので、景色が開けているんです。モルゲンロート(朝焼け)は、冬の北アルプスがピンク色に染まり、根子岳の影が映るんですが、アーベントロート(夕焼け)は、根子岳が真っ赤になります。30年たった今でも、感動する景色です。また、峰の原高原では、満天の星空を見ることができます。日没も、年間を通して位置が違うことがハッキリ分かります。ここで暮らすようになって、四季の移り変わりに敏感になりました。私は、生まれ変わっても、もう一度、峰の原高原で暮らしていきたいです。私の思いに共感していただける方に、峰の原の良さをお伝えしたいです」

ペンション　あるぷ

長野県須坂市仁礼峰の原高原3153-860

No17　峰の原高原で子育て　／　ペンションスタートライン　古川さんオーナーご夫婦

峰の原高原の第２ペンションエリアに鮮やかな緑色のペンションがあります。ペンションスタートラインのオーナー、古川さんご夫婦は、東京から移住をして、峰の原高原でペンションを営んでいます。オーナーの古川さんは、昆虫や魚が大好きで、水槽や虫かごがたくさん並ぶ、秘密の地下室まであります。虫好き、魚好きのお客様も全国から泊まりに来るそうです。ペンション経営や峰の原高原での暮らし、子育てについてお伺いしました。

●家族で始めたペンション経営

「私は、父の影響から、よく一緒に釣りや昆虫採集に出掛けていました。実家は、東京のど真ん中でしたので、辺りには自然が無く、自然豊かな所への憧れはありましたね。そんな中で、私が大学を卒業して少し経った、昭和61年10月に家族で峰の原高原にペンションをオ

ープンしました。父は、仕事が忙しく、基本的には東京で働いていましたが、母が厨房を担当し、兄が接客、そして私はその2人のフォローをしていました。私は虫や魚が好きだったので、住むなら海沿いか、雑木林や川のあるところが良かったのですが、峰の原は、真逆の環境でした。また、就職せずにそのままペンション経営をすることに関して、戸惑いはありませんでした。私自身や私の家族も、就職に関しては、サラリーマンでなければいけないという考えもありませんでした。ペンション経営も、始めてみたら楽しいもので、生活には満足していました」

●夫婦二人でペンション経営へ

「その後、兄は、父の仕事の手伝いで東京に戻ってしまい、母と私でペンションを切り盛りしていたんですが、母が年末に大けがをしてしまったんです。幸い、大事には至らなかったのですが、母にこれ以上負担を掛けられないという思いもあったので、私が宿を経営することにしたんです。平成2年に結婚し、夫婦二人でペンションを営み始めました」

●好きを仕事に

「ペンションを経営していたのですが、魚好きの私としては、どうしても一から魚を養殖したいという思いもありました。夫婦でペンションを切り盛りするようになり、初めは大変でしたが、落ち着いたころから、魚の養殖を始めることにしました。市外ではありますが、水利権を取得し、岩魚などの川魚の養殖をしています。そこで養殖した魚は、料理としてお客様にも提供しています。自分にとって、信州で暮らすことは、天国なのかも知れないです。信州は、私の好奇心を刺激する大きな遊び場で、住んでいても飽きることがないです」

●地域全体で子どもたちを見守ってくれている

「大学時代には、塾で講師をしていたこともあり、峰の原でも長年子どもたちに勉強を教えていました。私自身、子どもが好きでしたので、今でも、菅平の中学校にバスケットを教えたり、定期的に塾で算数も教えています。峰の原の子どもたちは、保育園、小中学校と10年以上同じ子どもたちと顔を合わせるため、子どもたちの繋がりも都会とは違います。また、地域で見守っている雰囲気もあり、私たち夫婦も周りのペンションオーナーに助けて頂きながら子育てをしてきました。説明が難しいですが、峰の原で育った子どもたちは、都会の子と比べて感性が豊かだと感じます。峰の原の自然からさまざまなことを教わっているのだと思います」

●峰の原での暮らし

「養殖や塾講師など、今までいろんなことをしてきましたので、私は、ペンション経営者という感覚はほとんど持っていません。ただ、自分の中でこれだという芯は、常に持っています。ペンションオーナーは全て自分でやらなければならない分、納得して仕事ができます。しかし、何もしなければ、生活していけません。そして、やること全ては、自分の責任になります。しかし、自分の生き方を洗練させていくには、これほど恵まれた環境もないと思います」

ペンション　スタートライン

長野県須坂市仁礼峰の原高原3153-885

No18　峰の原高原とそこで暮らす人々　／　ペンションホワイトイーグル岡本さんオーナーご夫婦

峰の原高原は大きく3つのエリアに分かれます。第一ヴィレッジ、第二ヴィレッジ、そして、菅平高原に隣接するグリーンダボス別荘エリアです。ホワイトイーグルのオーナーである岡本さんご夫婦は、グリーンダボス別荘エリアでペンションを始めて、今年で30年になります。スキーが好きで、若いころはよく、信州に滑りに来ていたという岡本オーナー。ペンション経営の経緯や峰の原での暮らし、子育てについてお伺いしました。

●信州へスキーに来ていた20代

「私は、東京の生まれで、もともと信州に対しては憧れを抱いていました。当時としては少し遅いですが、二十歳になってからスキーをするようになり、その時は、大きいスキー場へ行っては、何日か民宿で泊まりながら、夢中でスキーをしていました。その中で、野沢温泉の民宿のオーナーと意気投合し、お酒を酌み交わす仲になったんです。そのオーナーが個性的で面白い方でしたので、野沢温泉にスキーに行くときは、決まってその民宿に泊まっていました。そんなある時、オーナーとお酒を飲んでいた時、大きな会社の歯車もいいけど、そうじゃない生き方もあるよとオーナーが私に言ったんです。会社勤めだけが人生ではなく、民宿のオーナーの様な、自由な生き方もあるよと言いたかったんだと思います。私自身、そのオーナーの人柄に魅力を感じており、宿泊業もいいなと感じていました。思えばそれが、ペンションオーナーを始めるきっかけだったのかと思います」

●ペンションとの出会い

「20代は、スキーに夢中だったため、暇があれば滑りに行きました。そんなある日、会社の先輩から一緒にペンションで働かないかと誘われたんです。その時は、若かったですし、野沢温泉の民宿のオーナーとの話もあってか、迷うことはありませんでした。すぐに、行きますと先輩に返事をし、荷物をまとめて、東京から引っ越しました。そのペンションが、峰の原高原だったんです。ペンションは、夫婦で経営しているところが多かったですが、私と先輩は、オーナーの従業員として働いていました。ペンションもブーム真っ只中でしたので、忙しく働いていました」

●独立し、本格的にペンション経営

「その後、3年が経過した時、オーナーが違う事業を行いたいということで、ペンションを辞めるという話をしました。私自身、峰の原での生活は充実しており、他のペンションとの交流もありました。オーナーがペンションを辞めるから、このまま峰の原高原を去る、ということは私にとっては考えられず、思い切って、ペンションを自分で経営していくことにしたんです。そうなるとパートナーも必要になります。当時都心にいた彼女も連れてきました。宿は昭和59年の12月にオープンしました。峰の原高原のペンションオーナーに結婚披露パーティーを挙げていただき、地域でも結婚を祝福して頂きました。峰の原高原のペンションオーナーは、ほとんどが移住者ですので、当時からオーナー同士の結束があり、新しく仲間に加わるオーナーに対しても、歓迎する雰囲気がありました」

●子育て環境

「私たち夫婦は、峰の原高原で2人の子供を育てました。現在は、2人とも独立していますが、就職の際は、峰の原から出たくないと言っていました。親としては、育った地への郷土愛を持ってくれているのはとても嬉しく感じますね。子供たちは、幼いうちから自然の中を走り回っており、学校では、清掃登山やゲレンデの草刈りなども行っていました。田舎ならではの経験ですが、おかげで、体力のある子供に育ちました。都会の子供たちと交流すると、体力の差がよく分かります。峰の原の子供たちは、根子岳を走りながら登っていくに対して、都会の子供たちは、ゆっくり歩いても、途中で疲れて戻ってきてしまうんですね。都会で子育てすると、思いっきり走り回れる場所も少なく、山に登ることなんてほとんどないですが、ここは日常でそれができるんです。のびのび子育てできるので、都心と比べれば恵まれた環境だと思います。もし、東京でサラリーマンをしていたら、子育ては、今とはもっと違ったものになっていたと思いますね」

●ペンションオーナーとして

「峰の原高原観光協会の役員に在任していた当時は、様々なイベントを企画しました。その時も、オーナー同士協力して、楽しく準備などに取り組んでいたことを覚えています。現在でも、峰の原高原で開催するイベントの際は、オーナー同士が協力して取り組んでいます。新しくオーナーになる方にも、是非イベントなどに積極的に参加し、一緒に協力して地域を盛り上げてほしいですね」

ペンション　ホワイトイーグル

長野県須坂市仁礼峰の原3152-285

http://homepage3.nifty.com/whiteeagle/

ものづくり人材の原石磨き　／　相崎電機製作所の池田英平社長

　相崎電機製作所は、通信用プラグ・ジャック製造や精密機械加工を行っています。平均年齢が38歳の若い会社で現在、池田社長は39歳です。

●リーマンショックを乗り越え成長し続ける相崎電機製作所

「2002年に父親が亡くなり29歳で社長になりました。社長になったばかりの2年間は景気が良く、各産業向けの金属部品が売れていて私の能力にあまり関係なく会社は伸びて行きました。2008年にリーマンショックがあり売上が半分になりました。この状態が、半年間続けば会社が潰れることを覚悟しました。会社が潰れたら残された社員はどうなるのか？リストラはしたくなかったので真剣に考えました。仕事がないため週休4日（木～日）を休みにし雇用を維持しました。市の中小企業緊急雇用助成金を活用し、社員研修を取り入れたりもしました」

●逆境を逆手に取り、社員のスキルアップに努めた

「リーマンショックという外的要因でほとんどの製造業が落ち込みました。しかし、相崎電機製作所はひとつの業種ではなく様々な業種の方とお付き合いをしていたため、徐々に取引企業が回復の兆しを見せると自然に立ち直っていきました。また、研修を取り入れたおかげ

で社員の意識が変わり業務の改善活動に積極的に取り組むようになりました。しかし一番変わったのは私です。経営者としてさらに強く芽生え、10年～20年後の会社の未来を考え、今、会社に何が大切か考えるようになりました」

●長野県ものづくりマイスター制度

「日本のものづくりのエンジニアは凄いと思います。社員を見ていても細かい事もできるし、妥協も許さない。なのに社会的にあまり認められていないことが残念です。

すごい技術があるのに、ものづくりのエンジニアが認められない社会だと日本のものづくりは厳しくなると思います。

今年の3月から、長野県ものづくりマイスター制度を導入しました。長野県ものづくりマイスター制度とは、引退した職人などを会社に派遣していただき技術を教えていただく制度です。教えていただいた技術で社員は、資格取得をめざします」

●企業で支える将来のエンジニア

「これはあくまで夢なのですが、4月からスタートする須坂創成高校で機械加工の部活を作ったとします。長野県ものづくりマイスター制度で指導していただいた社員が育ち、部活の監督で指導することができれば自分の技術が地域にも役立ち、自分への自信になります。社員が自信を持って仕事に取り組む事ができれば会社としても成長できる仕組みになるのではないでしょうか」

●日本のものづくりの未来に対しての挑戦

「よく製造業関連の方とお話しをすると自分の子供を同じ職につかせたくないという話と後継者問題の話が話題になります。社長のワンマン経営や個人の能力で支えられた会社は後継者が育ちにくいんです。だからこそ、弊社は社員の主体性を引出し、もの作りに誇りを持てる仕組みを作りたいです。将来的にはもっと職人が評価される世の中になれば良いと思います」

●最後に

一緒に工場見学をさせていただき時、誇らしげに「ものづくりが日本の産業を支えてきたんですよ」と語っていただきました。工場では、社員1人1人が目標を持ち仕事に取り組んでいるのが雰囲気で伝わってきました。社員の方達は会社の将来像を明確に描きながら働いているのでしょう。

池田英平社長が従業員の方と足並みを合わせながら未来に歩んでいく姿は素敵だと感じました。

池田社長インタビューご協力いただきありがとうございました。

相崎電機製作所詳細

http://www.aizakidenki.co.jp/

創業120年続く、老舗のはんこ専門店　／　土屋印店5代目店主の土屋さん

上中町にある土屋印店は、創業120年程になる老舗のはんこ専門店です。5代目店主で一級印章彫刻技能士の土屋武志さんは、お店を引き継いで9年目になります。平成27年2月23日に開催された第28回技能グランプリでは、印章木口彫刻の競技職種で、初出場ながら金賞(厚生労働大臣賞)を受賞される程、高い技術を持っています。また2年に1度開催される全日本印章業協会主催の全国印章競技会や毎年開催される大阪府印章業協同組合主催の大印展では、幾度も金賞を受賞されています。お店の中に飾られている受賞作品の印章は、もはやアートと言っても良い程、繊細で緻密にデザインされています。それでも、はんこ屋さんとして謙虚に製作に励む土屋さん。今回は、そんな土屋さんにお話を伺いました。

●創業120年程になる老舗のはんこ屋さんの5代目として

「祖父がお店ではんこの製作をしており、はんこづくりは、当たり前の光景でした。その後、先代である父が引き継いだこともあり、いつか自分もお店を引き継ぐのだろうという思いはありました。会計事務所の仕事を7年程していたのですが、先代の父が大きな手術をした時に、お店を引き継ぐことに決めました。前の仕事を退職し、そこから2年間毎週末になると、神奈川県の職業訓練校に通って、印章の製作技術の習得に励みました。そこで、はんこを彫る技術のみならず、印刀の作り方や字も習いました。現在でも月1回通っています。また、過去の受賞作品を見たり、別の加工技術などを勉強し、製作に応用していければと研究しています。はんこの製作は、印材を印刀で彫るという、一見してシンプルな作業工程ですが、だからこそ奥が深いです。特に昔の人の作品を見ると、その技術の高さを感じることが出来ます。レーザー加工では作り出せない様な緻密な作品もあります。お客様の大切な瞬間に立ち会えるからこそ、少しでもいいものに仕上げることが出来る様、日々心掛けています」

●はんこづくり

「はんこは、書体や文字の形を決めたら、篆刻台(てんこくだい)という台にはんこを固定し、朱墨を塗り、その上から筆で文字を書きます。そして、印刀を使い分けて朱墨の部分のみを彫ります。彫る作業は、荒彫りと仕上げの2工程ですが、1本のはんこを作るために7本以上の印刀を使い分けます。印刀は、自分の右腕となるものなので、自分で使いやすい持ち手を作り、使用しています。また印刀は、その都度砥石で磨いています。繊細な作業が多いため、砥石も印刀に合ったものを使用しています。道具のメンテナンスには特に気を遣っています」

●人生の特別な瞬間で使って頂くはんこ

「はんこは、人生の節目節目の特別な瞬間に使って頂くものです。大切な場面でお客様と関わることが出来るので、一本一本心を込めて製作しています。それが、はんこづくりのやりがいと魅力であると感じています。現在は、レーザー加工や彫刻機ではんこが作れるため、私たちのように手づくりではんこを製作するお店は減ってきていると思います。私たちも様々な設備は整えておりますが、大切な場面で使って頂くからこそ、他にはないオーダーメイドの一本を使用して頂きたいと思います」

最後に土屋さんは、いつか須坂にちなんだデザインのはんこや従来のはんこのデザインの枠を超えたものを作ってみたいと語って下さいました。須坂に訪れた際は、是非土屋さんの作

る、アート作品のようなはんこをご覧になって下さい。土屋さんインタビュー有り難う御座いました。

土屋印店
須坂市上中町157
営業9:00～19:00
電話026-245-0607
定休日　日曜・祝日

地域おこし協力隊　松田

見慣れた蔵の町とお祭り　／　仁礼町にお住まいのNさん

今回のインタビューは仁礼町にお住まいのNさんです。Nさんは、お父様の建築会社で働いており、3人のお子さんのお母さんです。

●須坂の暮らしについて
「学 生の頃、上田市に住んでいて須坂に戻ってくると蔵の町並みに慣れているせいか落ち着きます。須坂に住んでいても、地域の方達の顔がわかるので子供を外で遊 ばせていても安心して過ごせます。雪が降っても、誰か1人が雪かきするのではなく、地域の方達で行います。しかし、地域の繋がりが強い分、地域の外から来 る方に対しては、閉鎖的のような気がします」

●お祭りで繋ぐ伝統
「地域のお祭りでは、若い人達も舞いの練習をします。それを地域の子供達が見ながら育ち自然に伝統が受け継がれている風習があります」

須坂で色々な方とお会いしました。みなさん温和でマイペースに暮らしている方が多いような気がします。マイペースな生活を送れる須坂の暮らしは面白いかもと思いはじめました。

Nさんインタビューご協力いただきありがとうございました。

地域おこし協力隊 和田

高齢化や人材不足で悩む農家を救うスピードスプレヤー　／　株式会社ショーシンの小林代表取締役社長と製造部の小河原常務取締役

　株式会社ショーシンは果樹用のスピードスプレイヤー（農薬を散布するために用いられる薬剤噴霧機）を作られている会社です。インタビューに答えていただいたのは、小林代表取締役社長と製造部の小河原常務取締役です。

●自走式スピードスプレヤーの開発のきっかけ

「スピードスプレヤーを導入するきっかけは、須坂が果樹が盛んだったことです。農家の方が、安全かつ効率的に防除作業をするためにはどうしたら良いか？というところから始まりました。

元々ショーシンは、自動車整備および農用ティラー生産の会社でした。輸入品のスピードスプレヤーが当時、国内で先駆けて須高地区に導入が始まりました。輸入品は、トラクターで牽引する構造であり国内の果樹園では小回りが利かず不便でした。
そのような経緯から自動車整備等の知識を活かし、日本で始めて自走式で小回りの利くスピードスプレヤーを開発しました。
果樹園防除の負担を大幅に軽減し、日本の農業発展に貢献してきました」

●現場原物主義

「図 面だけ渡してその通りに製品が出来上がることはまずありません。必ず設計者と製作現場のコミュニュケーションが必要になります。そこで弊社は設計のビル と、製造の工場を渡り廊下で繋げました。これは設計者と現場がすぐに話合うことができるからです。だから弊社は、農家の方の多様な要望に応え、柔軟性とス ピードを持ちお客さんの要望に対応することができます」

●スピードスプレヤーのライフサイクルを強力にサポートする

「弊社は、スピードスプレヤーの設計、製造、営業、アフターサービスまで行っています。大手と違い、あまり外注に出さず、自社で製造を行うのでノウハウがあります。
使っていただいているお客様も、故障で壊れたとき、すぐに対応ができるということで他の会社から乗り換える方もいらっしゃいます。ですのでスピードと柔軟性が強みです」

スピードスプレヤー？神奈川県出身で農業にあまりなじみのない私にとっては初めて聞く言葉でした。
「須坂で設計から修理までやっている自動車メーカーがあるよ」
と前回の須坂仕事発見記でお世話になった相崎電機製作所の池田社長から紹介していただき御縁を持つことができました。
今後も、高齢化や人材不足で悩む農家を救う車であって欲しいと思いました。

地域おこし協力隊 和田

株式会社ショーシン

http://www.shoshin-ss.co.jp/

須坂の暮らしや日々　／　五閑町（ごかんまち）にお住いの藤沢正人さん

今回のインタビューは、五閑町（ごかんまち）にお住いの藤沢正人さん(33)です。生まれも育ちも須坂の藤沢さんは、2人のお子さんのパパです。須坂の暮らしや日々感じることをお伺いしました。

●須坂の暮らしで感じること
「よく家族で、臥竜公園や百々川（どどがわ）河川敷で遊びますが、子供たちが日常的に自然に触れられるのが須坂の特徴ですね。ですが一方で、須坂は個室の飲食店が少なく、小さいお子さんを連れて気兼ねなく食べられるお店が少ないと感じますね」

●おすすめの場所
「須坂駅の近くにかなめ町という飲み屋街があります。そこは、お店もアットホームな雰囲気でいいですよ。須坂に来たら是非かなめ町で飲んでほしいですね。また、ランチでおすすめなのは、塩川町にある割烹東山の天重です。須坂に来たらぜひ食べていただきたいですね」

●須坂の良さを感じてほしい
「飲みに行くにしても遊ぶにしても、わざわざ須坂に来てくれる人は少ないように感じます。行きつけの飲み屋さんもいつも同じ顔ぶれで、もっといろんな人に来てほしいなと感じます。須坂には須坂の良さがあります。直接来て感じてほしいですね」

藤沢さんは、幼い頃から、親御さんに連れられて、よくスキーをされていたそうです。何と3歳から滑っていたそうで、小学校からは山スキーを履いて、標高2,207mの根子岳から滑り降りていたそうです。これからお子さんが大きくなったら一緒にスキーを楽しみたいともおっしゃっていました。
藤沢さんインタビューへのご協力有り難う御座います。

藤沢さんおすすめのお店の情報
割烹 東山
長野県須坂市塩川町58
電話 026-246-8100

地域おこし協力隊 松田

盆栽と魅力と須坂　／　松山園（しょうざんえん）/山本千城子（ちやこ）さん

　盆栽屋の松山園（しょうざんえん）にお邪魔しました。松山園には、見渡すかぎり盆栽があり、盆栽ワールドが広がっています。
インタビューに答えていただいたのは、オーナーの山本千城子（ちやこ）さんです。山本さんは、四代目の園主で、唯一女性で盆栽技能保持者の１人です。日本盆栽作風展組織委員長賞の受賞経験者としても、山本さん以外に女性はいません。

●盆栽屋のはじまり

「明治時代に曾祖父の商売は古典植物の蘭、万年青(おもと）から始まりました。当時、須坂で盆栽ブームが起こり、販売する植物も盆栽が多くなり、盆栽を中心に販売することになりました。
盆栽が何故、多くの人が買い求めたかというと、お金持ちのステータスであり趣味であったためと聞いたことがあります。盆栽を買われた方は、人を招く時に、自ら丁寧に育てた盆栽を玄関に飾り、迎えたそうです。玄関に飾った盆栽を見て、盆栽が来客者との共通の話題として場を和ませるために使ったそうです」

●四代続いた盆栽屋の理由

「須坂市は、明治・大正時代製糸業で飛躍的に発展し、盆栽も広がるほど文化を持つ町でした。文化レベルが高いこの地域だからこそ四代に渡って盆栽屋を営んでこれたと思います。これから私がやるべきことは、心のゆとりを楽しむ古来の伝統文化の盆栽を継承しつつ、そこに新たな風を吹き込んでいくことだと思っています」

●盆栽の魅力

「盆栽は生きているものだから変化を楽しむことができます。鉢が小さく外の土より温かいため、四季の変化を先取りして楽しむことができます。手の平サイズで楽しめるのも魅力で、自分でイメージしながら盆栽を作っていくのも楽しみの一つです。
盆栽は手間を怠ると枯れてしまいます。手間が足りなかったことを教えてくれます。逆に、手間をかけて育てると立派に成長してくれます。自分の気持ちに向き合うのに似ているところが良いですね」

●できるだけ身近に、手軽に楽しんでもらいたい

「山で種を拾ってきて、芽が出るまで育てます。小さな鉢に差し替え、盆栽を仕立てていきます。このように盆栽を始めるのは、簡単で誰にでも楽しめる趣味です。
私は盆栽をもっと身近に知っていただき、素晴らしさ、面白さをより多くの方と共有したいと思い、記念樹として親しんで欲しいと提案しています。娘が生まれた記念、結婚記念、旅行の記念などに盆栽を始めれば、その愛着もひとしお、家族みんなに愛される盆栽の誕生です。きっかけさえあれば、盆栽に触れる機会、趣味人口も増えていくと思います」

ああ、盆栽って綺麗なんだな。盆栽に今まで触れ合う機会のなかった私は、新しい発見をしました。手のひらサイズの小さな世界。小さな世界の中には、四季によって違う姿を見せてくれます。じっくりと小さな世界に向き合い思いを馳せると、人の手で丹精込めて作られていることを知り、心があたたかくなりました。
山本さん貴重なお話しをお聞かせいただき、ありがとうございました。

地域おこし協力隊 和田
※平成26年1月1日須坂新聞 参照

松山園
http://shouzanen.net/

長野県須坂市幸高町4381
お問い合わせ
026-248-0080

細かい気遣いで地域に愛される鮮魚店　／　有限会社坂詰商店/坂詰久さん

有限会社坂詰商店は、太子町にある鮮魚を専門としている商店として、地元の方から親しまれているお店です。
創業は、今から130年程前。曾祖父である初代店主が新潟から須坂に移り住みお店を始めたそうです。
店主の坂詰久さん(39)は、会社を仕切る4代目社長。お店では、鮮魚以外にも食品、酒類な

どを取り扱っています。お店の特徴は、何と言っても新鮮なお魚。毎朝長野市の市場から仕入れ、常時30種類程がお店に並んでいます。

●自然相手の商売。お客様との日々のコミュニケーションが大切

「店頭での生鮮食品の販売や、飲食店への卸売などを行っております。この商売は、天候に大きく左右されます。天気が悪くなれば、船は出港出来ません。そうすると、市場に並ぶ鮮魚の種類や量も減ります。また、魚は生き物ですので、いつも同じ量が獲れるわけではありません。その日によって質も違います。脂がのって魚が一番おいしいと言われている冬が、実は漁師にとっては漁が一番大変な時期です。特に日本海側は天気が荒れやすく、船が出港できないことも多いです。
自然相手ですので、お客様の要望に応えるためには、天候のチェックは勿論のこと、市場や港の状況を常に先読みすることが肝心だと考えていますが、それ以上に、お客様との日々のコミュニケーションが何より大切だと考えています」

●市場での経験が今の仕事に生きている

「市場で5年。その後、お店に戻ってきて5年間社員として働き、10年前に代表になりました。市場では魚の種類や鮮魚の流通について実践で学びました。市場には多い時で、70から80種類の魚が並びます。1年を通して変化する市場で、魚の鮮度や質を見抜く目利き、そして鮮魚の流通については、お店にいては見ることが出来ません。
天候の良し悪しが市場をどう左右し、それが川下にどのような影響を与えるのか、川上の現場で見てきたことは、今の仕事に大いに役立っています」

●人気の銀だらの粕漬け

「お店で、銀だらの粕漬けを作っています。銀だらは、脂がのっており、身が柔らかく、そのまま粕漬けにすると、水分が多く、調味料が十分に浸み込みません。お店では、前の晩に塩漬けし、翌朝水洗いした後、調味料に漬け込みます。そうすることで、余計な水分が抜け、身が締まり、味の浸み込みが良くなります。
手間のかかることですが、おいしく召し上がって頂きたいというこだわりと、そのために手間を惜しまない姿勢こそ大切だと考えています」

●専門店だから出来るサービス

「昔に比べると、鮮魚の専門店は徐々に減ってきています。お客様もスーパーでまとめ買いをしてしまうため、八百屋や魚屋、肉屋などの昔ながらの専門店にとっては、今は大変な時代だと思います。
長野の市場も10年前から競りの規模を縮小してしまいました。時代の移り変わりと考えてしまえばそれまでですが、専門店だからこそお店ごとに個性があり、専門知識や情報提供などは、大型店やスーパーにはできないサービスだと思います。
ご来店頂いた際には、魚の美味しい時期、調理方法、おいしい魚の見分け方など、お話しできればと思います」

最後に、坂詰さんは、これからの須坂について次の様に語って下さいました。
「須坂は観光資源があり魅力的な所ですが、やはり住んでいる人にとって、住みやすい場所であるかが大切だと思います。須坂に暮らしてよかったと感じてもらえるような場所であり続けるためにどうしていくかをこれからも考えていきたいですね」

坂詰さんインタビューありがとうございました。

有限会社坂詰商店
須坂市大字須坂664
電話026-245-0370

地域おこし協力隊 松田

須坂の木材が地域に役立つ仕組み　／　（有）丸山材木店　代表取締役　丸山剛さん

　丸山材木店は須坂市で唯一、住宅用の木材を製材し、大工さんや建築会社向けに販売している材木店です。森林組合が地域の森林からチェーンソー、グラップル（木材を切れるショベルのようなもの）で伐採したものを仕入れ製材しています。製材している丸太はほとんどが地域の山から切り出したものです。

●木材の乾燥機
「通常、製材した木材は１～２年ほど自然乾燥させなければ使えません。しかし木材乾燥機を使うと５日間～10日間で乾燥させ、短時間で住宅用木材として使用できるようになります。弊社でも数年前に乾燥機を導入しました。
間伐材を間引かないと他の木が育ちません。他の木が育たないと森林は継続せず枯れてしまいます。乾燥機を導入したお蔭で地域の間伐材を時間をかけず住宅資材として活用し、地域の森林の保全にも役に立っています」

●信州木材製品認証工場
「信州の木で家を建てたり、リフォームすると助成金がもらえる制度があります。信州木材製品認証工場が供給する木材を使用すると申請がスムーズに行えます。認証工場になるには、乾燥機の導入、品質、寸法など厳しい基準をクリアしなければなりません。弊社でも乾燥機導入後、基準をクリアし認証製品を供給できる工場として認定されました。これを機に今まで以上に長野県産木材の活用を推進できればと思っています」

●木の家の良さ
「木は呼吸をしています。湿度の多い時は、湿気を吸い湿度の少ない時は湿気を吐き出します。ですから木の家は気持ち良く健康にも良いのです。
3年前、弊社近くの高甫保育園を改築した際、弊社の木材を使用しました。構造材や造作材、羽目板など、ほとんどが高甫地区の山から伐り出された間伐材を使用した木造園舎です。その後に建築された千曲保育園や相之島保育園、北旭ヶ丘保育園、井上保育園も全て須坂の山の間伐材をふんだんに使用しています。その構造材や造作材のほとんどが弊社で製材し、乾燥させた木材です。子供たちが安心して元気に遊べる園舎を建築するお手伝いができたこと、またそれによって地域の森林を元気にするお手伝いもできたことを大変うれしく思っています」

せっかくインタビューさせていただいたので、丸山材木店で製材した木材を使い建てられた高甫保育園にお邪魔しました。園長先生は「新しい木を使っているので、明るく、木の温かい印象を受け、子供たちものびのびと元気に駆けまわっています」とおっしゃっていました。
地元の木材を地元で使う。地域内でお金が回る事は、無駄なコストを省き、市内で木造住宅

を建てる予定のある方に対してはありがたい制度と感じました。
丸山さん、インタビューご協力いただきありがとうございました。

地域おこし協力隊 和田

丸山材木店
http://members.stvnet.home.ne.jp/wood-maru/

須坂に住んでいる方の人の良さと地域の伝統　／　北旭ヶ丘町にお住いの藤沢明美さん

今回のインタビューは、北旭ヶ丘町にお住いの藤沢明美さんです。結婚を機に須坂に移り住んできた藤沢さん。大学生と中学生になる、2人のお子様がいらっしゃいます。
須坂の暮らしや日々感じることをお伺いしました。

●須坂市民の人の良さ
「須坂市は、長野市と比べると駅前が閑散としていたり、子供を遊ばせられる公園が少なかったり、洋服を買えるお店が少なかったりと、少し不便な所があります。それでも私自身、須坂市民の人の良さに惚れており、また、多くの人に支えて頂いています。
須坂市に移り住んで20年程になりますが、須坂の人は温かみがあり、大好きですね」

●須坂市の魅力
「現在、井上でやきとり屋を経営しています。
昔、井上には井上城があったそうで、地域としても歴史のある所です。それを裏付ける様に、区の活動も盛んで、神楽や獅子舞などの伝統行事も残っており、お祭りでは子どもたちが太鼓を叩きます。
少子化で無くなりつつあるお祭りや伝統行事を子供たちに継承していけることって素晴らしいですよね。地域の方の誇りを感じます。そういった、地域の活動が残っているのは、須坂市の魅力の一つですね」

●住み良いまちづくり
「移住してもらうことはとても良いことだと思います。私も須坂市に来てよかったと思っています。
今後も、住む人が須坂っていいところだなと思えるよう、もっと地域を活性化していってほしいと思います」

藤沢さん、インタビュー有り難う御座います。

藤沢さんが経営するお店です。
やきとり とりでん
須坂市井上町2250
営業時間17:00～23:00
定休日 日曜・祝日

地域おこし協力隊 松田

創業130年の老舗の割烹料理店「能登忠」　／　割烹料理店「能登忠」の女将さんである田幸久子さん

　能登忠さんは、明治、大正、昭和と須坂の製糸業の繁栄と衰退や様々な歴史とともに一緒に歩んできました。格式張っていると思われがちな懐石料理に親しんでもらう工夫を凝らし、気軽に楽しんでもらう努力を重ねています。 女将さんである田幸久子さんにお話しをお聞きしました。

●須坂に嫁ぐきっかけ

田幸さんは、元々警察関係の仕事をされており、当時の上司の紹介を機に能登忠4代目当主の田幸 新一さんと出会い結婚し女将さんになりました。
「私は、須坂の事を知らなかったので、地域の方やお客さまにお話しをお聞きし学んでおります。まだまだ知らないことがたくさんあります。学びは尽きないと思っています」
とおっしゃいます。

●料理に込める、ささやかな思い

「お客様が予約していただく時は、できるだけ多くの情報を聞き、要望によって料理を工夫しています。例えば、ご結納でしたらエビの背中を丸くします。嫁ぎ先でお嫁さんが腰が曲がるまで長生きできるようにという意味が込められています。その他に、〝よろこんぶ”という事で、こんぶで巻いたものを、その料理の中にお祝いをつくります。先代から受け継いだ教訓として、素材の持ち味を殺さず、活かすことを教えられました。靴を脱いだら揃えることが当たり前のように、今後も、学んだ事をコツコツ積み重ねていきたいと思います」

●お客様の心を感じ取り、真正面から向き合う

「お客様が10組いれば、10通りの場合があります。その中でも、お客様がどのような状況なのか心で感じとらなければいけません。乾杯のタイミング、お食事中の笑い声、お食事の進み具合などから感じとり、料理の順番や、お声がけする言葉を選んだりします。想像力や広い引出しが必要で、これは経験でしか身に着けられないものです。中には、私が良かれと思っても、お客様からお叱りを受けることもあります。お客様を悲しませることは、私がどんなに準備し、お気遣いしたとしても間違った事です。そのような事は、弁解せずに頭を下げ謝ります。お客様から学ばせていただけるところはたくさんあります。スタッフを見ていると、大変な経験をしている人は、人の気持ちを感じ取れるような気がします。お客様に対してプロである以上、失敗は許されないことですが、指摘していただくことは能登忠のためを思っていただけることですから、すべて教えと思い、学びだと思っています」

●五節句の意味を伝えたい。

「日本には五つの節句があります。五節句にはそれぞれ大切な意味があります。例えば、五月の端午（たんご）の節句には、柏餅を食べます。柏は新芽が出るまで葉が落ちないことから、家系が絶えない縁起物とされたそうです。今の子ども達はそのような意味を知らない人が多いような気がします。それは、情報が多様化しすぎて、うまく伝わらなかったからだと思います。四季の料理を通して、料理の思いや意味をたくさんの方にお伝えし、文化の意味を実感することができ、人生が豊かになるお手伝いをしています」

●今後について

「人が生まれてから亡くなるまで、人間模様として、お宮参り、五節句、結納、結婚、節目のお祝い、還暦、卒寿、米寿・・（葬儀）のように、様々なイベントがあります。そのような日本文化は、どこの国にもない独自の文化です。今後、その文化を大切にし日本文化のあり方を多くの方に、伝えていければと思います。
私、個人としてはお墓に入るまで勉強だと思っています。だから70代、80代になっても、まだ知りたいことはたくさんあり、知らないことは山ほどあるからです」

冠婚葬祭とはなんだろう？私は女将さんの話を聞き調べてみました。
冠婚葬祭は、元服・婚礼・葬儀・祖先の祭祀のことと出てきました。
個人的な解釈として、人が生まれてから死ぬまで、そして死んだ後も人のことを思い続けるための行事なのかなと感じました。
大切な人を思い、特別な料理をゆっくりと味わいながらいただく。
何故そのようなことが、この時代まで受け継がれているのでしょうか？
そこには、今では忘れがちな大切なことで他者への思い。誇るべき日本文化。そして、それを繋ぐ方達の涙ぐましい努力が詰まっているからなのではないかと思いを馳せました。

田幸さんインタビューご協力いただきありがとうございました。

地域おこし協力隊 和田

割烹料理店「能登忠」
http://www.notochu.jp/

No19　須坂住んで11年、暮らしてみて感じること　／　須坂に移住して11年になる高橋さんご夫婦

今回のグッとくるすざかは、Ｉターンで須坂に移住して11年になる高橋さんご夫婦のご紹介です。

●移住のきっかけ

「夫が体調を崩してしまい、千葉で静養していたのですが、夏暑く、自然も少ないため、安静にしていても、あまりいい環境とは言えませんでした。また、愛犬のバーニーズ犬もスイス原産のため、暑さに弱く、獣医さんからも千葉では長生きは出来ないだろうと言われていました。そんな中、もともと、夫が自然豊かな所で暮らすことに憧れており、いつかは移住したいという希望がありました。
夫の体調や愛犬、これから先のことを考えて夫婦で移住を決めました。
須坂市を選んだのは、自然環境がスイスに近いということと、土地を見に行った時、北アルプスと北信五岳を望める雄大な景色に一目惚れしたからです。
移住先を検討する時、北海道や軽井沢など色んな場所を探しましたが、ここが一番よかったです」

●地域との関わり

「私たちの住む米子町は須坂市の中山間地域でも奥まった所に位置しています。
移住して来た当初は、地域に馴染めるか少し不安でしたが、徐々に打ち解けることが出来ました。
きっかけは愛犬との散歩でした。愛犬と散歩していると地元の子供たちが近寄ってきて可愛

がってくれるんです。バーニーズ犬は大型犬で、日本でも飼っている人は少ないので、子どもたちも珍しかったんだと思います。そのうち、家に遊びに来てくれるようになり、そのことを子どもたちもお家でご家族に話してくれるみたいで、ある日散歩していたら、地元の方が、うちの孫がお世話になっていますと話し掛けてくれました。
愛犬がきっかけとなるとは思っていませんでしたが、少しずつ地域の方々ともお話しできる機会が増え、地域に馴染んでいくことが出来ました。
田舎は閉鎖的だといわれますが、私たちはほとんどそんなことは感じませんでした。むしろ、地域の方と関わるようになり、とても心強く感じています」

●11年暮らしてみて感じること

「須坂市に移住して来た当初は、静かで、灯も無く、買い物なども都会と比べて不便だったので、千葉での暮らしが恋しくなったこともありましたが、今ではここが大好きです。
北アルプスや北信五岳はもちろんのこと、星空、空気、おいしい水、新鮮でおいしい野菜や果物、そして何と言っても、人間的な暮らしを送れているという実感です。
また、須坂市は高速道路のインターチェンジや電車のアクセスが良く、長野市まで車で30分もあれば着きます。
田舎暮らしにしては比較的便利なのも、この地域ならではの良さだと思います。
ですが、田舎暮らしは都会と比べれば不便なものです。これから移住を検討する方には、不便さをも楽しむという気持ちを大切にしてほしいと感じます。
それこそが、移住を成功させる秘訣のように思います」

高橋さん、インタビューありがとうございました。

地域おこし協力隊 松田

No20　須坂を満喫する生活　／　8年前に須坂に移住された市村 美会子さん

今回のインタビューは8年前に須坂に移住された市村 美会子さんです。市村さんは東京出身で結婚を機に須坂に移住してきました。市村さんは、相之島工房という陶芸やクラフトの工房を営なみ、教室も開いています。自宅に作られた工房の庭先でインタビューに答えていただきました。爽やかな風が吹き、周りは緑に囲まれ ていて気持ちの良い空間です。

●故郷への憧れと転機

「長野に来る前は、東京で生まれ、東京育ちで旅行会社の仕事をしていました。実は、小さいころから田舎に憧れていました。憧れていた理由が2つあり、1つ目は、小学校の頃、友達がお正月やお盆におじいちゃんやおばあちゃんの所に帰省する姿を見ていて、帰るところがあって羨ましいと思っていた事です。2つ目は、旅行会社で仕事をする内に、どこかの地域に入りどっぷりと浸かって活動したいという思いがありました。そんなことを考えていると志賀高原の旅館で求人を募集を見ました。その旅館のキャッチフレーズ『故郷のない方いらっしゃい』に惹かれ、志賀高原の旅館に住み込みで働くことになりました。旅館の仕事のほかに、春から秋はネイチャーガイド、冬はスキーインストラクターなどをしていました。その後、結婚し、夫の故郷である須坂に移り住みました。本当はもう少し自然が多い山の中で

生活したいという思いがありましたが、今は須坂で良かったと思います。雪も少ないですし」

●東京と須坂

「東京から須坂に移り住みましたが、こちらの良さは肌で四季を実感できることだと思います。東京ではデパートのディスプレイを見て夏だ、秋だ、と感じていました。今は自然の移り変わりを生活の中で感じています。旬なものを食べたり、1年に２回車のタイヤ交換をしたり（笑）。須坂は首都圏からも遠すぎず、海からも遠すぎずで、ちょうど良い田舎という言葉が適切かわかりませんが、「ちょうど良い」と思います。須坂での暮らしが大好きなので余程のこと がない限り東京には戻らないと思います（笑）。」

●相之島工房をはじめたきっかけと今後の思い

「様々な年代の方に手軽に色んな体験をしてほしいと思い、現在の工房を始めました。工房とは別に、現在も行っているのですが、自然体験やネイチャークラフトを行っているＮＰＯ法人で活動しています。そのＮＰＯ法人の活動を通じて、陶芸の先生と出会いました。最初は自分が体験するだけでしたが、だんだんとのめり込み、本格的に習うようになりました。２年前、先生から『相之島工房』と名前をつけていただき、本格的に活動を始め ました。以来、創作活動を行いながらお客様を受け入れています。須坂のために何かしたいという思いから、蔵の町観光ガイドもやらせていただいています。ガ イドをすることで新しい発見があり、ますます須坂のことが好きになりました。」

●移住者へのアドバイス

「須坂は360度山に囲まれていて、志賀高原、白馬、戸隠へのアクセスが良いです。周辺地区の良さも味わってほしいと思います。まずは須坂の良さをわかってもらい、気に入ったら移住を考えれば良いかと思います。地域との交流に関しては、溶け込もうと思わなければ道は開けないと思います」

須坂での暮らしを満喫する市村さん。須坂に移住し工房を開いてしまう市村さんの行動力はすごいと思いました。市村さんインタビューご協力いただきありがとうございました。

地域おこし協力隊 和田

相之島工房
TEL 090-2412-7294
住所 須坂市相之島396-1
facebookページ
https://www.facebook.com/pages/%E7%9B%B8%E4%B9%8B%E5%B3%B6%E5%B7%A5%E6%88%BF/345480102300533

須坂での暮らし　／　米持町にお住いの田村さん

今回の市民リレーインタビューは、米持町にお住いの田村さんです。仕事の関係で須坂に移り住んで今年で2年だそうです。須坂の暮らしや日々感じるていることをお伺いしました。

●須坂に住んでみて感じること
「須坂市に来て2年目になります。自動車を持っておらず、バスなどの公共交通機関を利用

しますが、バス停の近くにスーパーなどがあるので、車が無くてもあまり不便だとは感じません。ただ、夜遅くまで営業しているお店が少ないのは寂しく感じます」

●須坂の気候
「南信と中信に仕事で住んでいたことがあるので、須坂の寒さには直ぐに慣れました。ですが、雪に慣れても雪道には慣れないですね。降っても20センチほどですが、都会から移住される方は雪の量に驚くかもしれませんね。
夏は日中暑いですが、カラッとしており、朝晩涼しいのは嬉しいですね」

●おすすめのお店
「おすすめのお店は、駅の近くにある「たれや」という焼き鳥居酒屋です。お店の雰囲気が好きで良く行きます。おすすめは私の好物でもあるとり皮です。機会があれば是非行ってみてほしいですね」

田村さん、インタビュー有り難う御座います。

田村さんおすすめのお店の情報はこちら
焼き鳥たれや
須坂市須坂1239-43 須坂市ハイランド１Ｆ
須坂駅から徒歩約1分
電話番号026-248-5715
営業時間夜は、16:30～24:00
定休日火曜日
HP：http://tare-ya.com/suzaka.html

地域おこし協力隊 松田

ファッションのバランス（調和）と思いやり　／　須坂縫製の会長の野平静子さんと娘さんであり、代表の土屋知明さん

　須坂縫製は日本を代表するファッションブランド「ハナエ・モリ」の専属工場として、商品の裁断から縫製までの仕立業務を行っています。会長の野平静子さんと娘さんであり、代表の土屋知明さんにお話しをお聞きしました。野平会長は、80歳超えてもまだまだ、お元気で本業以外でも生涯学習の講師やボランティアを行うなど、社会活動に貢献しています。

●デザインの始まりと現在まで

「私は須坂出身で、高校卒業後に東京の学校で縫製やデザインを学びました。その後、長野東急百貨店でオーダー服のデザイナーの仕事をしていました。そして、須坂に縫製工場を作りました。受注が欲しいため、東京のファッションデザイナーの家に飛び込み営業をしました。飛び込み営業をしていると、ファッションデザイナーの森英恵さんと出会い、幸いにもお仕事をいただくことができました。いただいた仕事を縫製工場のスタッフに告げると、こんなむずかしい縫製できないよと驚かれましたが、なんとかやり遂げ納品することができました。現在まで、ファッションブランド「ハナエ・モリ」の専属工場として続いていますが、色々な苦労があり、高級な生地の裁断を間違えてしまったこともあります。高級な生地を再度仕入れると採算が合わないため、余った生地を使い間に合わせました。苦労も知恵によって解決しました」

●ファッションはバランス

「ファッションは一言でバランスだと思います。派手に装飾することがおしゃれとは言えません。場所に合った服装がバランスだと思います。そのような事をわきまえながら暮らしていくと、やっていいことと悪いことの判断が付きます。だから服装は大事です。鏡の前に立つと良い顔をしますよね。髪型から始まり、笑ってみたり、怒ってみたりと表情を確認し、人様の前に立った時、どんな顔をしようと考えますよね。そのようなところからファッションは始まってくるかと思います」

●思いやりと教育

「現在は昔に比べて、道徳、マナーが忘れられているような気がします。
今の子供は、勉強ばかりで相手を思いやる気持ちが忘れているような気がします。たとえば、花を綺麗に育てた方がいるとしましょう。しかし、子供は平気で花を抜いてしまいます。育てた方の気持ちは本当に苦しいです。それに対して親は何も言いません。『大切に育てた花だから抜いてはいけないんだよ』と教えてくれる人もいません。例え花を抜いたとしても、『キレイに生けて楽しみましょう』と言える人を育てる教育をしていきたいと思います。それが今まで生きてきて気づいたことです」

野平さんたちのお話しをお伺いし、この服装は失礼にならないだろうか？このネクタイは派手すぎて場に合わないだろうか？など試行錯誤しながら服装について考えていました。しかし、お話しを聞いた後に、改めて考えてみると一番大切なのは相手や場に対する想像力と心遣いが必要なのではないかと感じました。
そして野平さんは、、常日頃からメモを取るそうです。理由に関しては
「メモを取り、また見返して覚えるんです。年を重ねると忘れやすくなるんです。年齢を重ねる自分に対して挑戦ですね」
とお話ししていただきました。
年を重ねても自分に対して努力する野平さんの姿勢は勇ましいと思いました。
野平静子さん、土屋知明さんインタビューご協力いただきありがとうございました。

地域おこし協力隊 和田

（有）須坂縫製
電 話：026-245-5537

ブルーベリーと豊丘地域に対する思い　／　豊丘地域でブルーベリー農園“そのさとブルーベリー農園”を営む市川さんご夫婦

上信越高原国立公園である五味池破風高原は6月になるとレンゲツツジの群生が見頃を迎え、100万株を超えるレンゲツツジの赤い花が咲き誇る景色を見ることができます。今回のインタビューは、その五味池破風高原の麓にある豊丘地域でブルーベリー農園“そのさとブルーベリー農園”を営む市川さんご夫婦です。農園オープンから今年で3年目を迎えるそうです。

●ブルーベリー農園づくりのきっかけ

「私(旦那さん)の父が農家で、果樹や野菜を作っていたのですが、6年程前に体調を崩してしまい、畑が空いてしまったんです。そのまま耕作放棄地にはしたくないと思い、全く農作

業経験のない私たちでしたが、畑を利用して何か栽培できる作物はないか、高齢になっても続ける事が出来る物はないかと色々探していました。
そんな時、妻が新聞でブルーベリー栽培の記事を読んだのがブルーベリーとの出会いです」

●ブルーベリーの可能性

「ブルーベリーは消毒が殆ど不要で、手摘みした実をそのまま食べることができるので収穫体験もできます。また、木の手入れの手間もそれほどかからず、管理もしやすく、これなら私たちでも出来るかも知れないと思い、ブルーベリーのことについてさらに調べました。すると、日本でいち早くブルーベリーの栽培をした信濃町のブルーベリー農家さんのことを知りました。夫婦二人でその農家さんに会いに行くと、なんとその方が偶然にも私(旦那さん)の知り合いだったんです。そんな縁もあり、ブルーベリー農園づくりを教えてほしいとお願いしたら、快く引き受けてくださいました。
土づくりや木の手入れ、苗の育て方など色々と教えていただき、現在50アールの農園には25種類のブルーベリーの木が500本植わっています。おすすめの品種はチャンドラーという500円玉ほどの大きさの実がなるブルーベリーです。他にもカシスの木も120本ほど植えています。
今年はブルーベリーに加えてカシスの摘み取り・果実の直売も考えています。また、ブルーベリーとカシスの果実を新鮮なうちにジャムやアイスクリームに加工し販売もしています。ジャム、アイスクリームは大変好評をいただいておりおすすめです。昨年は関東や中京圏からも収穫体験に来て下さいました」

そのさとブルーベリー農園のある豊丘地域は、住民自ら耕作放棄地を開墾してそば栽培を行っており、地域活動が盛んに行われています。市川さんもその活動に参加しており、昨年は豊丘産そば粉使用のそばアイスを開発し、販売したそうです。

●地域の方々の思いを届けたい

「私（旦那さん）はこの地で生まれ育ちました。冬場の雪の量は市街地より少し多いですが、とても住みやすいところだと感じています。ですがこのまま高齢化が進むと、この地域はなくなってしまうかもしれません。そばアイスを作ったのも、地域の方々の活動に対する思いを、市内に限らずいろんな方々に知っていただき、豊丘という地域を色んな方に知って頂きたいと思ったからです。
そばアイスのラベルにも豊丘地域の方の直筆で、豊丘で育ったそば粉使用と書いていただきました。
これから暑くなる時期に是非食べていただきたいです」

●今後の展望

「ブルーベリー、カシスを通じ、沢山の方々と交流し、須坂市豊丘地域をより一層発展させていきたいです。
豊丘地域は、農業後継者が少なくなり、また高齢化が進み、耕作放棄地が目立つようになってきています。それぞれ放棄地をなくすため、いろいろな作物等を栽培しておりますが、今後の高齢化を考えると、手入れ、管理がしやすい、カシス栽培が良いと思います。カシスは、土地を選ばず、比較的簡単に栽培、収穫ができ、これからの市場に最適と思われます。
豊丘をカシスの里として須坂市並びに豊丘の発展地域につながればと思います」

市内のイベントへの出店・売り子や農園の管理・運営は奥さんがメインで行っており、旦那さんは本業の傍ら農園の営業・広報や地域活動を中心に取り組んでいらっしゃいます。
農園の営業は7月初旬から8月のお盆まで行っております。また、そばの収穫をお祝いする新

そば祭りは11月の下旬に開催しております。
そのさとブルーベリー農園は黄色いお家が目印です。

そのさとブルーベリー農園
電 話：026-248-4627
ブログ：http://blog.suzaka..jp/sonosato.b.b.f

地域おこし協力隊 松田

No21　関西と長野　／　田の神町にお住いの関西出身のIさん

今回の市民リレーインタビューは、田の神町にお住いのIさんです。関西出身のIさんは学生生活を長野で過ごし、就職を機に須坂に移り住んだそうです。須坂の暮らしや日々感じることをお伺いしました。

●須坂に住んでみて感じること

「須坂市に来て1年が過ぎました。来た当初は、語気の強い須坂のイントネーションに少し戸惑いましたが、今は慣れ、むしろ温かみを感じています。生活に関して、食品スーパーなどは、市内に十分あるような気がします。ですが、それ以外の家具や家電などは長野市に行かないと無いので、少し不便に感じる人もいるかも知れませんね。交通の便は、高速道路のインターチェンジが近いので、車で遠出するには便利です。ですが、車が無いと生活するには大変ですね」

●須坂のお気に入り

「お気に入りの景色の一つに米子大瀑布があります。水しぶきを浴びるほど近づいて滝を見上げるのもいいですが、私は滝全体を見渡せる鉱山跡地から滝を見るのが好きですね。また鉱山跡地も、かつてはとても大きな施設があったのだと分かりますが、当時の名残りはほとんど無いので少しもったいないなと感じます。市内で当時の鉱山の生活の写真や実際に使用していた道具を展示してほしいですね」

●冬の暮らし

「あまり雪は降らないと聞いていたのですが、それでも雪は積もるなぁと感じます。寒いのは好きなのであまり気になりませんが、都会から移住してきた人にとっては、須坂の冬は寒さが痛いと感じるかも知れません。私自身は、雪の降らないところの出身なので、雪を見ると嬉しくなりましたね」

Iさん、インタビュー有り難う御座います。

暮らし観光須坂への挑戦　／　須坂市観光協会の常務理事の平井敏嗣さん

　平成26年から須坂市観光協会に戦略アドバイザーとして加わり、現在、常務理事として仕事をされている平井敏嗣さんです。平井さんは40年ほど鉄道関係の仕事されており、上諏訪駅長時代には住民の方と協力し、駅内に温泉露天風呂を設け話題を集め活躍されました。平井さんに、須坂市観光の目指すべき姿についてお聞きしました。

●須坂市観光協会の常務理事として

「私は、松本など県内のJRの駅長の仕事の中で、地域の観光協会と一緒に仕事をしたりイベントや宣伝の仕事をしていました。それを活かし出身地である須坂のために何かお役にたてないかと思い須坂市観光協会の仕事させていただいています。今年の3月には、須坂市観光協会の約120人の会員と事業総会を開催しました。須坂の観光については『住んでよし訪れてよし』のまちづくり、つまり生活文化観光に取り組んでまいりたいと思っています。須坂ならではの風情、歴史、文化、生活に触れていただく暮らし観光須坂をめざします」

●須坂の観光の魅力

「須坂は製糸業、精密部品の産業の発展と共に時代を経てここまで来ました。そのお陰で、観光産業にそこまで力をいれなくても発展することができました。時代の変化とともに、須坂も変わり10年前に比べると、観光客は減少傾向にあります。須坂は、隣の長野市の善光寺のように秀でた観光資源はありません。そのため地域の方が今ある観光資源を見つけ、守り、育て、磨かなければいけません。観光という切り口からみると小布施と比べると遅れています。逆にそのことが良いことだと思っています。観光地化されてない須坂にとって何ができるかと考えた時、いらっしゃった方が住んでいる暮らしに、心が触れる旅であれば、リピーターになっていただけます。ですから須坂の人の魅力がキーポイントです」

●須坂の今後の観光

「まず、内側を固めていきたいと思います。観光協会から地元住民や県外の人達の有志を募りサポーター的な意味をもつ組織をつくりたいと思います。須坂の観光に来る方は、8割が女性です。今までの須坂の文化は男性が中心に活躍していたかと思います。今後は、女性の感性を生かした組織作りができれば良いなと感じます。旅を知っている人、前向きな人、明るい人、が中心で活動すれば今後の須坂の観光は一歩前進するのではないかと思います。須坂のふるさと応援団の人達の積極的な参加も期待しています」

平井さん、インタビューご協力いただきありがとうございました。
最初に須坂に来たときに、駅前が廃れていて、駅の近くにあるショッピングセンターはシャッター商店街化していたり、観光名所の蔵の町並みでさえも、あまり人が歩いていなく肩を落とし、寂しい気持ちになったことを思い出しました。
しかし、暮らしてみると須坂ならではの郷土食に驚いたり、果物が本当においしかったり、昔ながらの蔵の素敵な宿があったり、信州ならではの気候を生かし庭づくりに励んでいる方にお会いしたり、まちづくりに一生懸命取り組んでいたりする方のお話しを聞いたりと感激した覚えがあります。
それは、日常の暮らしの中で生活を楽しんでいる方達でした。須坂の暮らしを生き生きとしている様子を多くの方に見ていただける生活文化観光の方向性を持った須坂の観光の今後がとても楽しみです。

須坂市地域おこし協力隊 和田

便利さとは反対のものを磨き続ける大切さ　／　「仙仁(せに）温泉　岩の湯」の社長であり、須坂市観光協会の会長である金井さん

　北信濃の人と自然が織りなすあたたかいふるさとの宿「仙仁(せに）温泉　岩の湯」の社長であり、2014年5月から須坂市観光協会の会長である金井辰巳さんにインタビューさせていただきました。「岩の湯」は、国道406号、菅平高原へ上がる途中の山里の一軒宿です。客室は18室ありますが、年間を通しての客室稼働率はなんと95%。世界最大をうたう旅行口コミサイト「トリップアドバイザー」では、「日本人旅行客が選んだ人気宿2010」の第1位に輝きました。本日は、金井さんに須坂市観光協会の会長として今後の須坂観光で大切にしなければいけないことなどをお聞きしました。

●便利さとは反対のものを磨き続ける大切さ

「須坂の観光は、1周遅れです。1周遅れの1番のような気がします。遅れた分、観光地化しておらず住みやすい町です。そこに社会的位置づけ、存在意義があると思います。ディズニーランドのアトラクションみたいなものと須坂は別のところを求められています。つまり便利さとは逆なものです。須坂は、そういったものを磨かなければいけません。便利さとは反対の大切なものを磨き続ける人でなければいけないと思っています。これからは、ゆっくりと、しっかりと充実した観光がテーマになってくるのではないでしょうか」

●今までの観光に縛られない

「多くの方が、今までの観光に縛られているような気がします。神社仏閣や風光明媚ではなく、幸せの場所を作りあげることが大切です。あまり、PRをしなくても、良かったら来てくれるというのが理想です。そのためには今までの観光に対する考えを変えることです。須坂の場合は、ようやく暮らし観光という定義が生まれました。暮らし観光の中身を議論し、磨き上げ、あせらず一歩、一歩、着実に進めていくことです」

●住んでいる人が気持ちよく生活を送ること

「須坂の町並みを歩いていることが、自分達にとっても幸せと感じられるような町になれば良いと思います。住民が歩き、観光客が来れば、交流になります。『やあ、おはよう』『こんにちは、どこから来たんですか』という感じですかね。観光のためではなく住んでいる人達のための町づくりです」

●緑がヒント

「以前、ヨーロッパに行ったときに感じたことは、ヨーロッパの人々は緑を大切にしており、緑あふれる公園のようなところに生き生きと暮らしているのを感じとりました。素晴らしかったです。私は、その方達を見て、人生を豊かに生きていると感じました。だから須坂も緑あふれる街になってほしいと思っています。老人が町を歩き、恋人同士が町を歩き、観光客が町を歩く。町に潤いが生まれてきます。例えば、1年30本街路樹を植えるとしましょう。10年で300本です。それだけで美しい緑の町になります。美しい場所には、人が寄ってきます。老人も、恋人たちも、子供も人間は美しい場所が好きです。住んでいる人でさえ美しい気分になるものです。住民の方が楽しんでいる様子を観光客が楽しんでいただけるのではないかと思います」

「岩の湯」は、自然が溢れ本当に気持ちの良い空間で木の美しい木漏れ日や鳥の鳴き声など、人間が求めている癒しや自然があります。
金井さんのお話しは夢に溢れ、本当に須坂がこんな町になったらきっと住んでいる方も気持ち良く心晴れやかで素晴らしい町になるのではないかと思いました。須坂が須坂らしく進化を遂げる道を今後も応援していきたいです。

金井さんインタビューご協力いただきありがとうございました。

地域おこし協力隊　和田

No22　転職を機に須坂に移住した感想　／　相森町にお住いのYさん

今回のインタビューは、相森町にお住いのYさん（29）です。飯山出身のYさんは札幌で9年間過ごし、昨年転職を機に須坂に移り住んだそうです。須坂の暮らしや日々感じることをお伺いしました。

●地域との関わり
「須坂市に来て1年になり、まだ分からないことも多いですが、暮らしていると地域の方の温かさを感じます。近所の方は新鮮な野菜や果物を分けて下さったり、また、歩いているとお声をかけて下さったりします。気に掛けて下さっているのはとても有り難いですね」

●暮らし
「私は人混みが苦手ですが、市内には歩いている人はほとんどいませんので、周りの人を気にする事なくゆっくり歩くことができます。また、市内にはスーパーやコンビニが充実しており、市民バスも巡回しているので生活の不便さは感じませんね」

●須坂のくだもの
「須坂は果樹農業が盛んで、大粒の種無しぶどうが有名ですが、私自身は移住するまで須坂のぶどうを食べたことがありませんでした。初めて食べた時、あまりの美味しさに驚いたのを覚えています。札幌の知り合いに送ったら『こんなにおいしいぶどうは今まで食べたことない』と言って頂き、とても嬉しかったです」

●冬の暮らし
「実際、思っていたほど寒くなく、雪の量も少ないと感じます。ですが、ちょっとでも多く雪が降ると、二輪駆動車では運転が大変ですね。須坂は文字通り緩やかな坂道になっているので、坂道発進の時に滑ってしまい登らなくなる時もあります。車はなるべく四輪駆動車がいいですね。ウィンタースポーツがお好きな方は尚更ですね。また、夏は日中暑いですが、夜は比較的涼しく、寝苦しさを感じることはほとんどありません」

●最後に
「須坂市には自然の魅力と歴史のある蔵の街なみがあり、人の温かさもあります。須坂に来て是非その魅力を感じてほしいです」

Yさん、インタビュー有り難う御座います。

新鮮な野菜と観光と暮らし　／　中島町にお住いのHさんです。

今回のインタビューは中島町にお住いのHさんです。長野市で生まれて、４歳の時に須坂に移り住んで以来、須坂から出たことがないというHさん。須坂の住み心地などについてお伺いしました。

●須坂での暮らし

「幼い頃に引っ越してきてからずっと須坂に住んでいるので、移住希望者の方々にとって須坂市がどんなところかを説明するのは難しいですが、日常生活に不便を感じたことはありません。周辺の市町村へのアクセスもいいので、買いたいものが須坂に無くても、20～30分車で出掛ければ長野市で揃えることができますし、また、高速道路のインターチェンジも近いので、ちょっと遠くに遊びに行きたい時なども気軽に出掛けることが出来ます。そういった意味では、生活する上で車は最低限必要ですね」

●須坂の景色

「米子大瀑布は、80メートル級の滝が2つあり、滝の真下まで行って、水しぶきを浴びることが出来ます。夏は行くだけで涼しむことが出来、秋は滝が赤や黄色の紅葉に包まれてとてもきれいです。是非見て頂きたい須坂の観光地です。
他にも、須坂は少し坂になっているので、どこからでも長野市の夜景がきれいに見えたり、また、春は千曲川河川敷一面が桃の花のピンク色に染まり、見ごたえがあります。須坂の何気ない日常の景色も季節によって変わってきますので、是非訪れて頂きたいです」

●野菜の美味しさ

「普段何気なく食べていた野菜ですが、須坂の野菜を都会の知り合いに食べてもらった時、『野菜の味がしっかりして美味しい』と言って頂きました。地方に行けば新鮮な野菜はすぐ食べることが出来ますが、それが当たり前の環境にあるということは嬉しいことですね」

●おすすめのお店

「須坂に来たら是非食べていただきたいのは、旋風堂という創作麺料理屋さんです。おすすめのメニューはとんこつあんかけ焼きそばですね。あんがパリッとした麺に絡み、くせになる美味しさです」

旋風堂
長野県須坂市明徳10－6
http://senpudo.com/

Hさんインタビュー有り難う御座います。

地域おこし協力隊　松田

お茶屋さんの在り方と須坂の在り方　／　蔦屋茶店（つたやちゃてん）の3代目、代表取締役である、岡田宗之さん

　蔦屋茶店は、1919年に創業した老舗のお茶屋です。蔦屋茶店はお茶屋ですが地域の方が訪れる憩いの場にもなっています。蔦屋茶店（つたやちゃてん）の3代目、代表取締役である、岡田宗之さんに蔦屋茶店の歴史、地域のお茶屋さんのあるべき姿についてお聞きしました。

●蔦屋茶店の歴史

「あと4年で100周年を迎えます。初代がお茶屋を始める時、長野市に蔦屋というお茶屋さんがありました。初代がそこで修行し、暖簾（のれん）分けをしてもらい開業しました。『蔦』というのは、よく伸び、縁起が良いところからの由来です」

●若い人にお茶のおいしさを伝えたい

「ティーパックとお茶っぱで入れたお茶を飲み比べてみたらお茶っぱの方が断然おいしいです。理由はうま味成分の抽出のしやすさだと思います。今後は、若い人達に対してお茶っぱで入れるおいしさを伝えたいという思いがあります。そこで、お手軽に美味しい水出し煎茶が作れるボトルを販売しています。ワインボトルに似て、とてもおしゃれです。そして、水出しにすると、渋みがなくカテキンという成分が少なくなり甘みがでて飲みやすく美味しいです」

●商店街のお茶屋としての在り方

「ここまで続いた理由は、庶民に愛されたお茶の文化があるからです。当然、商品を売らなくては商売は成り立ちませんが、商店街の一角にあるお茶の専門店として気軽においしく飲んでいただく場で在りたいと思います。そのような場を通して自然にお茶を好きになっていただき親しんでいただければ嬉しいですね」

●若い人が発言する場所を作りたい

岡田さんは今年度から市議会議員を務められ、地域活動にも積極的に活動されています。そんな岡田さんに今後の須坂の在り方をお聞きしました。

「住んでいる人が安心して楽しく暮らすことが大切です。観光ももちろん大切ですが、地元の人が楽しくなければ、観光に来た方も楽しくないと思います。そのためには若い人の意見を積極的に取り入れていきたいです。ですが、今の須坂には若い人達が発言する場所が少ないです。気軽に意見を言える場を作りたいと思っています」

岡田さんは、須坂で最年少の市議会議員でもあるため、若い世代を中心に注目が集まっています。須坂は化石とよく例えられます。若い人たちの意見を磨き粉として磨きをかけていただけたら嬉しいなと思いました。

岡田さんインタビューご協力いただきありがとうございました。

地域おこし協力隊　和田

信州須坂 蔦屋茶店
http://www.tsutaya-chaten.jp/

須坂をアウトドアスポーツで開拓せよ　／　須坂市役所生涯スポーツ課の永井推進役

今回のインタビューは、自然の資源を活用したアウトドアスポーツ振興の地域おこし協力隊を募集している須坂市役所生涯スポーツ課の永井推進役です。
活動する職場は、創造の家という、市役所から少し離れたところにあります。市民が気軽に寄れるようにジャズの音楽がかかっており、周辺には緑溢れる百々緑地公園があり、とても気持ちの良いところです。

●職場の雰囲気や地域おこし協力隊にやってもらいたいこと

「活動していただく職場は、スポーツ振興ということもあり元気で活発な職員が多く働いています。地域おこし協力隊には、しばらくの間は、須坂の気候、特色などを知っていただきたいと思います。その他にも、地域資源を見て、活用方法を考えてもらったり、スポーツ大会やイベントの準備などを手伝っていただきたいと思います。徐々に須坂のことが分かってきたらイベントなどを提案していただきたいと思います」

●地域資源を活用したスポーツを通して地域住民の潤いを作ってほしい

「地域おこし協力隊の方に活動していただく一番の目的は、市民の方にアウトドアスポーツで楽しんでいただくことです。外から来た方の目線でイベントの活用方法を提案いただける方を募集しています。
例えば、気軽に参加できるようなエコツアー、森林浴ツアー、滝周辺でマイナスイオンを浴びての水遊びを兼ねたウオーキング、根子岳、土鍋山などへの本格的な登山、トレイルラン、冬季のスノーシューを使っての新雪の雪山体験等です。
最終的には、地域外の方と須坂市民がイベントを通して、交流できるような仕組み作りを望んでいます。」

●気軽な気持ちで来てほしい。気に入ったら住んでもらえれば

「スキルアップの手段として地域おこし協力隊の制度を使っていただいても構いません。もし須坂が気に入り仕事が見つかれば定住していただければ良いかと思います」

自然が好きで1から地域資源を活用して何かを作りたいというバイタリティーのある方にはぴったりな仕事だと感じました。募集している地域おこし協力隊の募集と応募する方がうまくマッチングすれば良いなと思いました。

永井さんインタビューご協力いただきありがとうございました。

地域おこし協力隊　和田

須坂市地域おこし協力隊（スポーツ振興）の募集の詳細
http://www.rakuen-shinsyu.jp/work/9538

独自の食文化と須坂での生活　／　明徳町で創作麺料理のお店『麺処　旋風堂』のオーナーをされている田子公彦さん

今回のインタビューは、明徳町で創作麺料理のお店『麺処　旋風堂』のオーナーをされている田子公彦さんです。田子さんは、生まれも育ちも須坂で、長野市で働いた後、7年前にUターンをして現在のお店を始められたそうです。また、田子さんは、須坂を盛り上げるために、須坂市の史跡である八丁鎧塚古墳から生まれた『我竜神スザカイザー』という須坂のヒーローをひろめる会の会長も務めています。須坂の住み心地や日々感じることをお伺いしました。

●改めて気付いた須坂の良さ

「子どもの頃は、須坂は何もないところだと思っていたので、地元のことにはあまり関心が持てませんでした。また、お店の前の道は、子どもの頃、通学路として毎日のように通っていたのですが、そこから見える北信五岳の雄大な景色にもほとんど関心がありませんでした。
改めて、須坂の良さを感じるようになったのは、開業を機に須坂に戻り、家族で暮らし始めてからです」

●当たり前だけど豊かな暮らし

「山に囲まれたのどかな風景、地域の人の温かみ、夏の過ごしやすさ、旬の農産物や山菜、郷土食など、良いところは他にも沢山ありますが、須坂には、当たり前だけど暮らしに豊かさを感じさせてくれる要素が沢山あります。今は、その良さをもっといろんな方に知ってもらいたいと思っています」

●拠点としての須坂

「市外の方に、須坂に行ったことは無いけど、長野市や小布施町へ行く途中に通ったことはあると言われる時があります。長野市や小布施町と比べると須坂市の知名度はまだまだですが、裏を返せば、長野市や小布施町などの観光地に近いということが言えます。
そして、長野市まで行けば新幹線もあるので東京観光も日帰りで行けますし、海まで車で1時間と、海なし県なのに海水浴にも気軽に行けます。
観光地としてはこれからですが、須坂を拠点にすれば、県内外の観光地へのアクセスも良く、観光が好きな方にとっては住みやすい場所なのではないかと思います」

●独自の食文化

「北信である須坂の食文化の1つにあんかけやきそばがあります。普通やきそばといえば、ソースやきそばをイメージする方がほとんどかと思いますが、北信地域では、ソースの代わりにあんかけを絡めて食べます。また須坂市は、塩ベースのあんをかけるお店が多く、昔から須坂で営業しているラーメン屋さんでやきそばを頼むと、あんかけやきそばが出てきます。また、やきそばには、酢がらしをかけて食べます。北信独自の食文化ですので須坂に遊びに来た際は、是非あんかけやきそばを食べてみてほしいです。
　また、やきそばの他にも須坂には黒おでんがあります。臥竜公園周辺のおでん屋さんで食べることができ、静岡県の黒おでんと違い、しょうゆとだしのシンプルな味付けですが、長時間しっかり煮込んでいるので、具に出汁がよく染みていて、味が濃いのが特徴です。臥竜公園にはいくつかおでん屋さんがあり、お店ごと味が違うので、はしごをしながらご自分のお気に入りを探してみるのも楽しいと思います」

麺処　旋風堂
須坂市明徳10-6

026-248-1258
営業11:30～21:30（休憩14:00～18:00）
http://senpudo.com/

我竜神スザカイザーHP
http://suzakahero.jimdo.com/

田子さんインタビュー有り難う御座いました。

障がいを持つ方が支える職人集団　／　特定非営利活動法人まいぺーすの理事長の堀川勝巳さん

　特定非営利法人まいぺーすは、障がい等で企業で働くことが困難な方に対し、仕事や生活をサポートする事業やグループホームや相談支援事業などを行っています。理事長の堀川勝巳さんにお話しを聞きしました。
　理事長の堀川さんは、障がいを持つ方が、仕事を通して社会で自立するため、革製品を中心にこだわった商品を開発、製造、販売することで工賃をアップするために尽力しています。

●堀川さんが障がい者福祉を始めたきっかけ

「友人に障がいを持つ方がいて、何か役に立つことはできないかと思っていました。そんな思いがあり福祉大学に進み、現在に至っています。当時は、高度経済成長期のため障がい者福祉の世界に入る人は、ほとんどおらず珍しかったです。」

●求められている障がい者福祉支援のスキル

「日本の障がい者福祉の歴史は、工賃をアップするというよりは、障がいを持つ方を保護するという歴史から来ています。ちょっと作業をして、1日楽しく過ごせば良いよね、という感じです。よく他の施設に行くと、企業の下請けの仕事が多いのが現状です。
現在、職員に求められているスキルは2つあると言われています。1つ目は、障がい者をサポートする福祉的な役割、2つ目は、商売としてお金を稼ぐというスキルです」

●丁寧に、良いものを手作りで

「流れ作業は一切やりません。基本的に商品は1人で時間をかけ丁寧に仕上げ、できない部分は職員が手伝います。障がいのある方が自分が作ったものだと目に見えるようにするためです。目の前で、第三者に評価され、喜んで買ってくださると、すごい自信を持ち、より良いものを作ろうと努力します。自分そのものを認めてもらえたという感覚が自信に繋がるのではないかと感じます。ものづくりの中で、障がいがありながらも人間的にも成長しているところを見ると私は、最高に楽しいです。
私たちは、小さな事業所だけど職員と障がいを持つ方が、共に協力し製品を作り上げるので、職人集団だと呼んでいます。ちょっとかっこ付けているんですがね（笑）」

●今後の事業について

「障がいを持つ方が通うグループホームで『得体の知れない人達だ』と地域の人達に噂されたことがあります。しかし、雪が降った時、障がいを持つ方は、体力があったので、自分のところだけではなく周りの家も雪かきを行いました。『いつも元気よく挨拶を行い、雪が降ったとき、とても助かった』と地域の方がおっしゃっていただき偏見が少しずつなくなっていきました。
そのように少しずつでも良いので、地域に理解が広がっていけば良いと思います。将来的には、小規模でも良いので、地域に点のように施設を構え、点と点を面に変え、この地域を障がいを持つ方の住みやすい地域に変えたいと思っています。他者に対し理解がある地域、つまり障がいを持つ方が生活しやすい地域は、高齢者や子供も、みんなが生活しやすい地域に違いないです。そのようなことが、結果的には地域づくりに繋がると思っています。」

堀川さんは最後に「消費者には、障がいを持つ方が作ったという事を売りにはしません。製品としてちゃんと売れ、興味を持ってもらい、結果として障がいを持つ方が関わっているという事を後で知ってもらう事が大事だと思っています。買っていただいた方が、少しでも社会貢献できたと思っていただけたらありがたいですね。」とお話ししていただきました。見せていただいた革製品はデザインがシンプルでかっこよく、大切に長く使いこんだら味が出そうな魅力的な商品ばかりで、思わず、ペンケースとコインケースを買ってしまいました。
堀川さんが、障がいを持つ方と共に歩む喜びや、商品のことを楽しそうに語る姿は、私までそんな未来になったら楽しいだろうな、と思い、多様性を認める社会が少しでも須坂に広がれば良いなと感じました。

堀川さん、インタビューご協力いただきありがとうございました。

特定非営利法人まいペーす　詳細
http://npo-mypace.com/blog/info/%E9%96%8B%E6%89%80%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F/

No23　子育てや、生活がしやすい便利な須坂　／　高橋町にお住いの小山さん

今回のインタビューは、高橋町にお住いの小山さんです。小山さんは、結婚を機に須坂に移り住み、子育てをしながら高梨町でカフェを経営されています。須坂の住み心地や子育てについてお伺いしました。

●地域との関わり

「出身は中野市で、学生時代は長野市にいました。お店は3年前にオープンし、結婚するまでは、中野市から通っていました。通っていた時は、地域との関わりはほとんど無かったですが、須坂に住み始めてからは少しずつ地域との関わりも増え、子供が生まれてからは、更に地域との関わりを感じるようになりました」

●新鮮な農産物

「地域では、ご近所との交流もあり、外で会えば立ち話しもします。また、時期になると農産物のおすそ分けを頂くのですが、須坂は果樹農家が多いので、野菜だけではなく、ぶどうなどの果物のおすそ分けも頂きます。産地のものは新鮮で美味しいですね。スーパーの地場

産コーナーの野菜や果物も時期によって色んな農産物が並びます。都会にはない新鮮な農産物が食べられるのは、地方ならではですね」

●子育て支援サービス

「夫婦共に市外からきた人間なので、移住した当初は、どこで子育てに関する行政サービスが受けられるか、全く分かりませんでした。子どもが生まれてからは、保健センターをよく利用しています。相談員の方に、子育てについて相談したり、また、離乳食講座などにも参加しています。初めての子育てなので、移住者の私たちにとって、子育て相談が気軽に受けられる行政サービスはとても助かっています」

●生活しやすく便利な田舎

「休みの日は、家族で公園を散歩したり、市外や県外に遊びに行きます。高速道路のインターチェンジも車で10分ほどなので、気軽に出掛けることが出来ます。子供が生まれてからは、市外にあるショッピングモールに出掛けます。ショッピングモールは、一日楽しめるので、便利ですね。須坂市には、ショッピングモールなどの大型複合商業施設はないですが、ドライブがてら、車で1時間も行けば、市外のお店に行けるので、不便さは感じません。
都会の方からすると、須坂は田舎だと感じる所があるかと思いますが、私自身は、生活しやすく便利なまちだと感じます」

小山さん、インタビューにご協力頂きありがとうございます。

コラボカフェ　りーぷ
須坂市高梨字梨ノ木93-1あかね苑内
http://www.collabo-cafe-leap.com/introduction/

ホームページで写真を掲載しています。

須坂でなければ味わえない、おかあさんの味　／　「六本木」のオーナーである寺澤玲子さん

　郷土料理を提供する料理屋「六本木」は季節で一番おいしい食材を惜しげもなく使います。オーナーである寺澤玲子さんにお店のこだわりをお聞きしました。

●お店をはじめたきっかけ

「今から53年前になりますが、東京大学の食堂の調理スタッフをしていました。主人が体調を崩したことをきっかけに、主人の実家があった須坂に引っ越しました。
その後、立町で食堂『六本木』を開き、学生向けにラーメンやカレーを大盛りで提供していました。今でも、お店がテレビや新聞で取り上げられると、当時、学生だったお客さんから声をかけてもらえる事が嬉しいですね。」

●学生向けの定食から、季節のふるさと料理へ

「須坂の富士通が好調だった頃、工場長が、本社の上層部を連れてよく足を運んでくださいました。
その時、工場長から『須坂は肉や魚では、東京に勝てない。須坂で採れる食材をふんだんに使って、ふるさと料理を出して欲しい』と言われました。

せっかく来ていただけるお客さんに、地元のおいしくて珍しい食材でおもてなしをしたいと思い、本を読み漁り勉強しました。春は山菜、夏は新鮮な夏野菜、秋はきのこ、冬はドジョウやフナを煮たりと季節のものを使い、色々な工夫をし料理を作りました。
その結果『こんなに珍しい料理は、東京では食べられない。驚いた。』と、とても喜んでいただきました。

●食材を求めて・・・

「とにかく、食材を集めたり、下ごしらえが大変です。山に山菜やきのこを採りに行ったり、直売所を渡り歩いて買い求めます。
料理の横に食材を置くようにし、素材の形そのままを見てもらえるよう工夫しています。
お客さんは『この料理にはこの食材が使われているんだ。驚いた！』と目を丸くして喜んでくださいます。」

●43年続けられた理由

「驚いていただく、喜んでいただく、おいしかった、と言って帰っていくお客さんの姿を見れるのが、私の活力であり、43年続けられた理由です。
主人が亡くなって、14年になりますが、１人でお店を経営するのは、大変です。
ここまで継続できたのは、お店に足を何度も運んでいただけるお客様や良いスタッフのお陰です。とても感謝しています。」

何度か私も「六本木」に足を運んだことがあります。飲み会に参加されたみなさんが、料理を見た印象は「わぁーすごい。こんな料理、見たことない！」と目を丸くして驚かれます。
季節の一番おいしい食材を使った料理が、大盛りで出してくださり、心もお腹も満たされます。
寺澤さんの料理は〝おかあさんの真心"のようなものを感じました。

寺澤さん、インタビューご協力いただきありがとうございました。

『六本木』
住　　所：長野県須坂市大字須坂立町1453
電話番号：026-245-7815
※ご利用される際は、事前予約が必要です。

地域おこし協力隊　和田

No24　須坂の日常　／　高橋町にお住いの花岡さん

　今回の市民リレーインタビューは、高橋町にお住いの花岡さんです。今年の8月にご結婚されて、旦那さんの職場のある須坂に移り住んで来られたとのことで、ご夫婦とも中野市ご出身の新婚さんです。須坂の住み心地についてお伺いしました。

●暮らすのに便利な須坂

「高校を卒業して、学生時代は東京に暮らしていました。就職を機に地元の中野市にUターンし、須坂市に来るまでほとんど地域のことは知りませんでした。須坂市に移住したのは、

主人の職場があるということもありますが、須坂市が、実家のある中野市と長野市のちょうど間で、行き来に便利だったということもあります」

●地域との関わり

「市役所で引越しの手続きをする際、市内の医療機関や施設の情報をまとめた冊子を頂きました。私たち夫婦は、ともに地元が中野市で、病院などは、何処に行けばいいか分からないので、冊子があるととても助かります。
また、手続きの際に案内されて、区長さんへも引越しの挨拶に行きました。今まで実家暮らしで、地域との関わりは、両親がやってくれていたし、東京にいる時は、区というもの自体が無かったので、初めての体験でした。今はまだ、引っ越してきたばかりなので落ち着きませんが、地域にも少しずつ関わっていければと思います」

●便利な立地と狭い道

「休みの日は、上田市や長野市に出掛けたり、たまに新幹線で東京にも遊びに行きます。また、夏は新潟まで海水浴に行きます。須坂市にも魅力的な所はありますが、県庁所在地の長野市に近く、高速道路のインターチェンジも近いので、市外や県外に気軽に出かけられるのは、須坂の良さですね。
ただ、市内は、道が狭く、一方通行の道もあり、迷路のように入り組んでいて運転にはまだ慣れません。それでも、道は平坦だと感じるので、自転車でも過ごせそうです。買い物も、スーパーがまとまっているので便利だと感じます」

●都会と田舎の違いについて感じること

「学生時代、東京にいたので、都会と田舎の差を感じます。須坂は、夜がとても静かで、8時頃になると、人の声や車の音もしなくなります。都会は人も車も多く、活気があり、夜も騒がしく、その分賑やかで楽しいですが、心が休まることが無いですね。
また、都会のスーパーでは、レジ係の方は、混まないように対応しなければならないので、接客も事務的になり、淡々と接客されている印象を受けますが、須坂は、レジが混み合うことはほとんど無いので、レジ係の方も、お客さん一人ひとり丁寧に対応して下さっている印象を受けます。それに、急かすお客さんもほとんどいないですしね。
都会は人が多く、何事もテキパキとこなさなければ暮らしていけませんが、須坂の暮らしには、その必要は無いように感じます。だからこそなのか、地域の人もゆとりがあって温かい人柄の方が多いように感じます。
移住を検討される方には、まず、地域に住んでいる人の温かみを感じて頂きたいですね」

花岡さん、インタビューにご協力頂きありがとうございます。

地域おこし協力隊　松田

No25　手作りの暮らし　／　新規就農者の田中哲（さとし）さんと奥様の久子（ひさこ）さん

　新規就農者の田中哲（さとし）さんと奥様の久子（ひさこ）さんです。ご夫婦は、埼玉から引っ越し、豊丘上町で築93年の古民家を自ら改修し、二人のお子さんと山羊などの動物と

暮らしています。
　そんなお二人に、須坂に移住するきっかけ、また暮らしについてお聞きしました。

●移住のきっかけ

「キャンプに行くのが好きで『いつか、空気や景色がきれいな所で、ゆっくりと丁寧な暮らしがしたいね。』と主人と話していました。古民家が好きで、一年ぐらい色々な地域を回り、須坂にとても素晴らしい古民家を発見し、すぐに決めました。
　私達は、プロが改修した家があまり好きではなく、手作りの良さを出したかったため、自分達で改修しようと決めました。」
と、久子さんは、話してくれました。
　そして哲さんは、市の新規就農者里親制度を活用し、果樹農家である古川さんのもとで学んでいます。
　農業をはじめたきっかけは
「元々、植木屋をやっており、樹木に触れる仕事だったため、農家も近いところがあるのではないか」
と話し、里親の古川さんは
「哲君は、先を予想して仕事ができる人で、仕事をおぼえるのが早いので、期待しています。」
とおっしゃっていました。

●地域との関わり

　哲さんに地域の関わりについて聞いてみたところ
「引っ越して来たばかりの頃、家に帰ってくると、近所の方が大根や白菜などを家に置いてくださったり、娘たちに対しても、りんごや手作りのお菓子を持たせていただくなど、とても感謝しています。」
とお話しされていました。地域に溶け込むのに苦労はされなかったですか？とお聞きしたところ
「できるだけ地域にお役に立ちたいと思っているので、町の行事には出るようにしています。こちらから積極的に関われば、地域の方は、優しく接してくださいます。」
と笑顔で語ってくれました。

●暮らしの変化

久子さんは
「埼玉に住んでいた時は、家で絵を描いたり、手芸をするのが好きでした。こちらの生活では、動物の世話をしたり、野菜を作っていると、一日が、あっという間に終わります。外仕事は大変ですが、なんとか慣れました。そんな暮らしをしていると動物と話せるような気がしていきました。」
と笑顔で話されていました。
「山羊7匹、ニワトリ27羽、アヒル1羽、ひよこ5羽、犬3匹を飼っています。知人からは、『アルプスの少女ハイジみたいな生活だね。』と言われ、ハイジのＤＶＤをプレゼントされました。
　友人たちも遊びに来てくれて、『空気が綺麗だね。』と感想を話していました。住んでいる所が、観光地である五味池破風高原のふもとにあるので、ゆくゆくは、観光に来た方が楽しんで頂ける何かを提供できれば。」
と考えているそうです。

●農村に寄り添う、暮らしの発展

久子さんは、
「夫婦で話合い、ゆっくり丁寧な暮らしをしようと考えていました。はじめてトマト、きゅうり、かぼちゃ、ズッキーニなどを育てましたが、とてもうまくいきました。旬なものを食べるのが一番健康的で、体に良いと感じます。
　野菜が採れすぎて、どう料理するか大変でしたが、おかげで料理がとてもうまくなりました。
　疲れて、料理もできない時、主人が料理をしてくれます。主人の料理の腕もだいぶあがりました。」
とお話ししていただき、哲さんは
「インターネットでレシピを検索し、作っています。畑で採れた野菜を使って料理をするとやはり美味しいです」
と話してくれました。

　哲さん、久子さんをインタビューして感じたところは、暮らしを自分達の手で作り、楽しんでいるということです。お二人の今後が楽しみで、須坂にも暮らしを自分達の手で作り、楽しんでいる方が増えれば良いなと思いました。
　哲さん、久子さん、インタビューご協力いただきありがとうございました。

地域おこし協力隊　和田
2015,9,25インタビュー

No26　須坂で暮らしてみて　／　春木町にお住いの上澤さん

　今回の市民リレーインタビューは、春木町にお住いの上澤さんです。結婚を機に、旦那さんのご実家のある須坂市に引っ越して来たとのことです。須坂の住み心地についてお伺いしました。

●中野市から移住

「4年前に、東京から実家の中野市へUターンし、さらに、今年の8月に結婚して、それを機に中野市から須坂市に引っ越してきました。引っ越し以前は、毎年臥竜公園の桜を見に来ていましたが、それ以外に須坂市で遊ぶことはほとんどありませんでした。
　ですので、住むまでは須坂の住み心地が分かりませんでした。今住んでいる町は、駅に近く、遅くまで営業しているスーパーやコンビニなどもあるので便利です。
　中野市に住んでいた時より、長野市に近く、終電も遅くまであるので、時間を気にせず遊べるのも良いですね。もっと、市内にゆっくりおしゃべり出来るようなカフェがあれば尚いいなと思います」

●Uターンのきっかけ

「Uターンのきっかけは、東日本大震災での被災経験からです。電車が止まり、帰宅難民になりました。帰ることが出来ず、たくさん人がいるにもかかわらず、被災すると助け合うどころではなく、みんな孤立していました。
　私は同じ職場の人といたので、助け合うことが出来ましたが、とても大変な思いをしました。その経験以降、都会で暮らすことに疑問を感じるようになりました。
　また、以前から、通勤ラッシュ時に子どもが一人で電車に乗り込んでくる様子を見て、違和感を覚えていました。その子にしてみれば当たり前のことですが、よく考えてみれば、危険ですし、子育てにも良い環境では無いと感じます。

もちろん都会には華やかな部分があり、魅力的ではありますが、それでも、将来のことを考えると、やっぱり子育ては、気兼ねなく走り回ったり、土に触れたりできる場所が良いと思います。
都会へは、たまに観光や買い物、友達に会いに行く程度でいいと感じます」

●地域で暮らす安心感

「夫婦ともに職場は中野市ですが、旦那さんの実家が須坂市だったので、須坂市に引っ越しました。挨拶回りでご近所の方とお話しした時、皆さん歓迎して下さり、新鮮なお野菜や果物のおすそ分けを頂きとても嬉しかったです。
東京で学生生活を過ごし、3年間、社会人として千葉に住んでいましたが、そこでは隣近所との関わりも無ければ、だれが住んでいるのかも分からず、何かあっても頼れる人が近くにおらず、不安を感じていました。地域の方に歓迎してもらえると、こちらも安心できますし、また、何かあってもご近所同士で助け合うことが出来るのでとても心強く感じています。
移住してきた人には、是非地域と積極的に関わっていただきたいですね」

上澤さん、インタビューにご協力頂きありがとうございます。

地域おこし協力隊　松田
2015,9,25インタビュー

No27　そっとあたたかく、やわらかい家事の道具や生活雑貨のお店　／「sketch in -hike-」(スケッチイン-ハイク-)のオーナーである須坂市出身の依田しずよさん

築100年近くの土蔵を改修した「Sketch in -hike-」(スケッチイン-ハイク-)は家事の道具や生活雑貨を扱っている雑貨屋さんで今年の7月にオープンしました。　須坂市本上町にあるゲストハウス蔵の奥にある、くぐり戸を抜け、飛び石を歩くと庭が広がっています。庭の右手側の柿の木の裏にあります。住宅地の中なので、くぐり戸を抜けると、別の空間が広がり、たどりつくまで探検をしているようでワクワクします。

「Sketch in -hike-」のオーナーである須坂市出身の依田しずよさんに須坂で「Sketch in -hike-」を開かれた理由や大切にしていることなどを聞きました。

ちなみに、依田さんのご主人は、施工管理までできる設計士です。ご主人の協力で、築100年近くの土蔵の空間が生まれ変わりました。

●お店を開くきっかけ

「雑貨屋を開こうと思ったきっかけは、東京に住んでいた時に雑誌で調べ、色々なお店を回り気に入ったお店に行くと楽しかったり気持ちの良い気分になりました。また、クリスマスの時期に雑貨屋さんでアルバイトをしていて、クリスマスツリーの飾りなどを販売し、すごく楽しそうにお客さんが商品を買って帰られるのを見て幸せな気分になりました。
そんなことから、いつかお店を開きたいと思っていました。
その後、長野市で気に入った物件があり、お借りして雑貨屋を開き13年営業しました。
須坂に移転した理由は、ゲストハウス蔵のオーナーの山上さんとオーナーのお母さんの誘

いがあったことや、ゲストハウス蔵の裏の立地が気に入り、くぐり戸を抜け飛び石を歩き、お店に入るまでの過程を来ていただいたお客さんが楽しんでいただけるのではないかということで決めました。」

●扱っている商品について

「流行に流されず、オープン当初から長く扱っている商品が多いです。例えば、ドイツ生まれのウェックというメーカーのガラス保存食器です。
　一時期、人気で全国の雑貨屋さんに広がり、その後あまり見かけなくなったりしましたが、良いものだと思ったのでずっと扱っています。
　揃えている商品の仕入れについては、基本的に探すというより色々なところに行き、目の前にあり良いものだと思ったものを仕入れます。良いものだと思う基準は、飾りではなくしっかり使えるもの、古くなってもカッコ良く味のあるもの、回りにあるものと調和するものです。」

●空間や生活に馴染むこと

「Sketch in -hike-」の空間は、入り口の扉が重りで閉じる仕組みになっていて、重りには多面体のガラスが使われ、開閉時にカラカラとかわいい音を立てたりします。小さい窓にちょこんと人形が座っていたりと、不思議と心地良い一体感があります。そんな一体感がある空間が良いなと思い、依田さんの好きな空間について気になり聞いてみました。

「例えば好きな絵だったり、好きな人形がおいてある部屋なんて素敵です。
北欧風やナチュラル風などに縛られることなく、そこに住んでいる方の色が表れたり、気持ちの良い空間が一番だと思います。」

　インタビュー中も、お客さんが何人かいらっしゃっていました。商品を買い求め、帰っていく姿を見ていたのですがなんだか楽しそう。お部屋に合うとっておきのアイテムをみつけたのでしょうか。
　心をくすぐる家事の道具や生活雑貨ばかりの「Sketch in -hike-」ぜひ一度、足を運んでみてはいかがでしょうか？

「sketch in-hike-」
須坂市須坂39
tel:026-285-0113
営業時間11時～16時30分
定休日：月、火、日曜不定休
ホームページ
http://sketch-in.petit.cc/

平成27年10月9日　地域おこし協力隊　和田

子育ての環境　／　生まれも育ちも須坂の中村さんです

今回の市民リレーインタビューは、生まれも育ちも須坂の中村さんです。結婚を機に、ご実家を出られ、現在は、2歳のお子さんと旦那さんの3人で南原町に暮らしています。
旦那さんは長野市出身で、現在長野市の会社にお勤めですが、奥様の実家が近いということ

と住み慣れた須坂市なら子育てしやすいという理由で、須坂で暮らすことに決めたそうです。須坂の住み心地についてお伺いしました。

●子育て環境

「子供が今2歳で、市の子育て支援センターをよく利用します。子育て支援センターは、子育てをしているお母さんやお子さんなら誰でも利用でき、1階ではお子さんが走り回れる広場があり、トランポリンや滑り台などの遊具がたくさんあります。また2階はじゅうたんの部屋があり、1歳未満のハイハイのお子さんでも安心して遊ばせることができます。
長野市にいる友達も須坂市の子育て支援センターを利用できるので、一緒に子供たち同士で遊んだり、お母さん同士で子育てについて情報交換をしたりします。センターでは定期的に講座やイベントも開催しており、気軽に参加できるのもいいですね。
他にも、市の保健センターでは、１歳児健診や妊婦健診など、子育てに関するケアがしっかりしています。私自身、須坂市の子育て環境には満足しています」

●お出掛けするとき

「私の住んでいる南原町は、家から歩いて行ける距離に公園が無く、どこか遊びに行くときは車で出かけています。市内は臥竜公園や子育て支援センター、また市内の保育園は園内を開放しているので、保育園にも行きます。市外だと、小布施町の子育て支援施設のエンゼルランドセンターや小布施町のハイウェイオアシスに行きますね。
また、子育てをしているママ友同士で集まる時は、お互いの家に集まります。須坂市内では、小さい子供を連れて気兼ねなくおしゃべりできる場所が少なく、外で集まる時は、長野市まで出掛けてしまうことが多いですね。
須坂にも小さい子供を遊ばせられるキッズスペースのあるお店が増えてくれると嬉しいですね」

●アクセスの良さと、迷路のような道

「都会から引っ越してきた友達は、高速道路のインターチェンジが近く、関東方面へのアクセスが良いところや、長野市まで出れば新幹線も高速バスもあるので、須坂を住みやすい地域だと言ってくれています。
また、道が迷路のようになっていてわかりにくいという意見もありますが、私は、今までずっと須坂だったので、いろんな抜け道を知っています。時間帯によって少し混む道もありますが、基本的には渋滞はありません。移住された方には、迷路の道を逆手にとって、ぜひ抜け道を見つけてほしいです」

中村さん、インタビューにご協力頂きありがとうございます。

平成27年10月8日
地域おこし協力隊 松田

須坂クッキング！　／　豊島にお住まいの永井晴美さん

　豊島にお住まいの永井晴美さんは、料理好きで、クックパッドというオリジナル料理レシピの投稿・検索ができるWebサイトで240個のレシピを掲載しています。テレビ番組の「はなまるマーケット」の料理コンテストで優勝した経験やレシピ本に料理が掲載されるなどすごい腕前の持ち主です。

高校一年生の息子さんがいて、お弁当の写真などをインターネットで紹介しています。色鮮やかなので見ているだけで楽しくなります。
そんな永井さんにお料理や須坂での暮らしのことについて聞いてみました。

●料理のレシピを作りはじめたきっかけ

「もともと子供の頃から料理をするのが好きでした。仕事の関係で、パソコンの練習をしようと思いクックパッドに料理を掲載しはじめました。
家庭料理はちょっとしたコツでおいしくなるので、大切なポイントなども掲載しています。
息子が『おいしかったよ。また作ってね』と言ったものは間違いないです。家族に好評だった料理を掲載しています。
料理も失敗することも多いです。でも、思いがけず、おいしい料理ができると嬉しいですね」

●楽しい思い出を広げるレシピ

「旬を過ぎたりんごで何かおいしいものをできないかと考えていました。そんな思いから、りんごの生キャラメルを作りました。
クックパッドに掲載したところ、『バレンタインデーで大切な人に渡しました。受け取った方が、おいしかったと喜んでくれました』『料理が苦手だけど、うまくできました。』とレシピを見て作った方からメッセージをいただけたのが嬉しいですね。自分が作ったものが広がり、違うところで作って食べてもらった方の喜ぶ姿を想像すると楽しいです。
クックパッドに掲載するようになって8年になりますが、若いお母さんたちが作りやすいように分かりやすく書くようにしています。お料理を楽しむきっかけ作りになればうれしいです」

●須坂の子育て

最後に永井さんに須坂での子育てについてお聞きしました。
「須坂は、近くに住んでいる方と顔の見える関係をもてるので子育てしやすいと思います。
町の広さや施設などもちょうど良くバランスの取れた町だから暮らしやすいです」

お料理レシピを拝見したのですが、サッカーボールケーキ、じゃが丸コーン 、森のチョコタルトなど愛嬌あふれるネーミングのレシピばかりで、読んでいるだけでも楽しくなります。
ぜひ一度、永井さんのお料理レシピを試されみてはいかがでしょうか。

永井さんのクックパッド（春小町のキッチン）
http://cookpad.com/kitchen/532341
永井さんのお弁当の写真など
https://instagram.com/harukomati/

平成27年10月28日 地域おこし協力隊 和田

須坂のおいしいものや休日の過ごしかたなど　／　村石町にお住いの齋藤さん

今回の市民リレーインタビューは、村石町にお住いの齋藤さんです。須坂の住み心地についてお伺いしました。

●子育てについて

「市内の子育て支援センターや小布施町の子育て支援施設のエンゼルランドセンターをよく利用します。須坂市の子育て支援センターは、大きいお子さんと小さいお子さんがそれぞれ遊べる部屋があり、もうじき１歳になる娘を気兼ねなく遊ばせてあげることができるのでいいですね。
また、須坂市は市役所の方が親切で、母子手帳をもらった時とても丁寧に対応してくれたのを覚えています。母子手帳も人気のキャラクターがデザインされており、長く使うものなので、デザインに気を遣ってくれるのは嬉しいですね」

●須坂にあったらいいなと思うもの

「市内には小さな子供を連れて気兼ねなく食事のできるお店が少ないので、座敷や個室のお店がもっとあれば、子育て世代のご家族はありがたいと思います。
また、子ども服の専門店が市内にはないので、買い物に行くときは長野市まで行きます。長野市まで車で30分もかからないので、遠くは感じませんが、できれば子ども服の専門店も市内にあると嬉しいですね」

●休日の過ごし方について

「子どもが生まれる前は、戸隠や高山村の山田牧場、新潟県の上越に観光に出掛け、ショッピングに行くときは、松本や上田のショッピングモールによく行きました。
子どもが生まれてからは、子ども服の専門店があり、モール内には授乳室もある上田市のショッピングモールに行ったり、また、市内では百々川の緑地公園に行きます。緑地公園は芝生がきれいに整備されていて、とても広いので、安心して子どもを遊ばせることができます。須坂動物園にも近いのでいいですね。ママ友同士で子どもと一緒にピクニックに行くときもあります」

●須坂に来たら是非食べてほしい

「おいしいお店はいろいろありますが、特におすすめしたいのは、割烹東山です。須坂市街地から長野市に向かう国道406号線沿いにあり、実家に近かったということもあってか、子供の頃からよく家族で食べに来ていました。
おすすめのメニューは天重です。黒い特製タレに浸かった揚げたてのてんぷらがごはんの上に乗っており、てんぷらが黒すぎて、食べてみないと中の具わからないという面白さがありますが、何とも言えないおいしさです。須坂に来た際は是非訪れてほしいお店ですね」

齋藤さんインタビューありがとうございました。

割烹 東山
長野県須坂市塩川町58
電話 026-246-8100

平成27年10月22日
地域おこし協力隊 松田

移住でお仕事についてのご相談お待ちしています！　／　キャリアカウンセラーの林日女子（はやし ひめこ）さん

　須坂市就業支援センターのキャリアカウンセラーの林日女子（はやし ひめこ）さんは、就職が困難な方に対してアドバイスを行う仕事や移住体験ツアーに参加された移住希望者の方に仕事の個別相談をしています。

●林さんが担当する業務内容について

「私は普段、市内で仕事に関して悩みを抱える幅広い年齢層の方の就業相談に応じています。
最近では、職場での人間関係に悩んだり、うつ病などの精神的な病を抱えた相談者が増えており、就業そのものへの支援だけでなく、相談者が日ごろ抱えている悩み相談などにも親身に応じています。」

●私が移住希望者に対してできること

移住希望者のニーズとして、仕事も相談できる何かがあったほうが良いのではと信州須坂移住支援チームの中で意見が出たため、林さんにご協力いただき、移住体験ツアーの中で、仕事の個別相談を実施しています。
個別相談の中で移住希望者にどのようなお話しをしているか、お聞きしました。

「まず、移住希望者とお話ししながら、移住し、どのような暮らしを望むのかをイメージするお手伝いをします。そのイメージを共有し『最初の一歩はこのようにしたら良いですよ。次の一歩はこうしたら良いですよ』と具体的にアドバイスしていきます。
　仕事に関しては、一回お会いしただけで紹介するのは難しいので、何度かやり取りをしながら移住希望者が興味のありそうなお仕事の情報をメールで送ります。そのお仕事に対して面接を受けるかどうかは移住希望者に任せています。
　例えば、移住希望者で山が好きで移住を考えていて、ホームページの作成の仕事をしている方がいました。その方には『社会経験があるので、それを踏み台にして須坂で仕事を見つけることは可能だと思います。もし具体的に移住の話が進んだらお仕事を探すお手伝いをするので連絡してください』とアドバイスをしました。」

●最初の一歩と外から目線だからこそフォローできる信州須坂移住支援チーム

「まず移住希望者には、須坂という場所がどういう場所なのか何度も来ていただき知っていただきたいと思います。来ていただき良いところ、悪いところを知っていただき判断していただければよいと思います。
　須坂市には移住希望者を支援する信州須坂移住支援チームという係があります。移住支援チームの地域おこし協力隊は、須坂市出身ではありません。須坂市出身ではないからこそ、須坂の良いところ悪いところなどを伝えられる部分を期待しています。」

●須坂に都会の文化を、須坂の文化を都会に

「移住した方に期待することは、須坂に都会の文化を持ってきていただき新しい風を吹かせていただくことです。逆に須坂から仕事などで転出する方に関しては、須坂の良さを都会に伝えていただきたいです。都会と須坂の交流によりどちらとも良くなることが理想ですね。」

●夢に挑戦！

「須坂に住んでいる知り合いの外国人が自動車免許を取った翌日に、車で広島に旅行したという話を聞きました。
　私はビックリしました。でもよく、考えると日本は狭いので心理的距離を感じているのは、日本人だけかも知れないですね。移住まで行かなくても、まず気軽に須坂に遊びにきてほしいです。何せ、東京から須坂まで新幹線を使用すれば、2時間で行ける時代ですもの。
　移住は夢と思われがちですが、自分なりのビジョンを描き、検討されている方はぜひ挑戦してほしいと思います。」

移住体験ツアーの個別相談会では、林さんの仕事に対しての個別相談の他、信州須坂移住支援チームも相談員として参加し、空き家バンクと移住全般に関しての個別相談も行っています。
12月5日に開催する移住体験ツアーは今年、最後のツアーです。
移住を検討されている方は、ぜひ参加してみてはいかがでしょうか。

平成27年11月13日
地域おこし協力隊　和田

須坂市就業支援センター(愛称「ゆめわーく須坂」)
http://www.city.suzaka.nagano.jp/contents/item.php?id=595ee2f8afa41

子育てママが気軽に行けるお店や須坂市の立地について　／　南横町にお住いの寺澤さん

今回の市民リレーインタビューは、南横町にお住いの寺澤さんです。小布施町の出身で、子供のころに須坂市に引っ越して以来、ずっと須坂に住んでいます。須坂の住み心地についてお伺いしました。

●子育てについて

「生後１０か月になる男の子がいるので、市内の子育て支援センターをよく利用します。市内には、子育て支援センターが４か所あり、どこの地域に住んでいても、車で５～１０分もあれば利用することができます。私は、市街地にある子育て支援センター（中央児童センター）をよく利用しますが、センターでは、生後２、３か月の赤ちゃんも利用できるようベビーベッドを用意してくれています。また、大きいお子さんと小さいお子さんが遊んでいる最中にぶつかって怪我しないように、遊ぶ場所を１階と２階に分けているので、目を離しても安心ですね」

●子育てママが気軽に行けるお店

「須坂市の子育て支援については満足していますが、周りのママ友と話をする中で、子ども服の専門店や子供を連れて気軽に行ける飲食店がもっと増えてくれると嬉しいという話をよくします。
　その中で、私がよくランチに利用するのはマリアカフェです。市内にあるマリアこども園という幼稚園の一室をカフェとして開放しており、手作りのバイキングランチを食べながら、ゆっくりできるのが魅力です。幼稚園なので遊具もあり、気兼ねなく子どもを遊ばせられるのがいいですね。また、カフェでは定期的にイベントも行っており、ヨガ教室や子育てママの健康チェックなども行っているので、ママ同士の交流ができるのもうれしいですね。子育て世代のママさんには是非おすすめしたい場所です」

●車社会だからこその良さ

「都会での子育ては、公共交通機関を利用するので周りの方に気を遣いますが、地方は基本的には車社会なので、子供が泣いたり、授乳やおむつ替えをするにしても、周囲に気を遣うことがほとんどないように感じます。都会で子育てしている友達からは、電車や新幹線での移動でいつも周囲に気を遣うという話を聞きます。子育てに関して周囲に気を遣わなくていいという点では、地方だからこその良さだと思います」

●須坂市の立地について
「私自身ウィンタースポーツが好きで、今は子育てしているので気軽には行けませんが、シーズンになるとよくスノーボードに行きました。須坂市は高速道路のインターチェンジが近く、各スキー場へのアクセスもいいので、大きいゲレンデまでの移動に１時間もかからないのが魅力です。須坂の雪の量はその年や地域によって違いますが、年に数回雪かきすれば大丈夫です。なので、ウィンタースポーツを楽しみたいという方にとっては、須坂の立地は比較的便利な場所だと思います」

他にも、インタビューには掲載しきれないほど、須坂の住み心地について色んなお話を聞かせていただきました。寺澤さんインタビューありがとうございました。

マリアカフェ
長野県須坂市春木町1092（マリアこども園内）
営業日：毎週火、木曜日
時　間：11時～14時
https://sites.google.com/a/suzakamaria.ed.jp/ma/mariacafe

平成27年11月2日
地域おこし協力隊　松田

No28　須坂の暮らしの文化を１人でも多くの海外の方に知ってもらいたい／　須坂市観光協会に所属する地域おこし協力隊のショウ センさん

　須坂市観光協会に所属する地域おこし協力隊のショウ センは、中国の河北省唐山市の出身の女性で大学4年時に、東京の大学に留学していました。その時に、須坂市出身の担当教授の紹介で須坂市地域おこし協力隊に応募しました。
観光協会では、海外の旅行者を須坂に誘致するため、須坂のＰＲのお仕事をしています。

そんなショウさんに、須坂に来て思うことや、地域おこし協力隊の活動についてお聞きしました。

●須坂と中国の架け橋

「須坂の観光資源を、中国語圏最大のソーシャルメディア『weibo』で情報発信をしています。須高ケーブルテレビさんのプロモーション企画で須坂の食文化をレポーターとして中国に紹介しました。他にも、須坂市の観光パンフレットやホームページを中国語に訳す仕事もしています。」

●はじめて須坂に来た時の感想

「山の景色がとても良かったです。生活していてもどこでも山が見れるし川も綺麗で環境が良いです。
　果物で一番好きなのが、シャインマスカットという品種のぶどうで、さわやかな甘みと、食感が好きです。おやきも中国の肉饅頭みたいで親しみを感じます。
　一人暮らしをているので少し寂しい時もありますが、須坂の方は、優しいです。来たばかりの何もわからない時に、迷っていると、声をかけていただき、案内するだけではなく、一緒に目的地まで連れていってくださいました。心があたたかいと感じました。東京や私の地元である中国の唐山市では体験できない事です。」

●台湾から修学旅行で来た中学生を案内した時の思い出

「台湾から修学旅行で来た中学生を須坂で観光案内したことがあります。台湾の子供たちに須坂を案内したとき、蔵の街並みが新鮮な景色だったようで感動していました。子どもたちは、須坂市内にホームステイをして、日本の家庭の暮らしも体験しました。翌朝、泣きながらホームステイ先の家族と別れを惜しんでいました。須坂は華やかな観光地ではなく、市民がゆっくりと住んでいる町です。そんな町で、海外の方が日本の文化に触れ、住んでいる方と交流し思い出を作る。その出来事が素晴らしいと思いました。
　今、日本に住んでいる留学生に須坂の文化を体験してもらいたいと考えています。私も東京で留学している時、勉強とバイトばかりで、あまり日本の文化に触れる機会がありませんでした。
　日本へ来ている留学生向けに、須坂の文化に触れる体験ツアーを企画し、東京の旅行会社へ提案する予定です。１人でも多く、留学生がバスツアーで須坂に来て、楽しんでもらうことが目標です。」

●日本に馴染むために

「Ｅメールのやり方、職場でのコミュニケーションの仕方、敬語の使いでわからない部分があります。図書館に通いマナーの本を借りて勉強しています。
　先日、目上の方と話しているとき、肘をついて話しているところを注意されました。反省しマナーを覚えました。
　社会人の一人として日本人のマナーを身に着けたいです。話すときもしっかり敬語を使い、仕事のやり方も日本人らしく責任を持ち、人とした約束を守ることが目標です。」

インタビューから、ショウさんが日本の文化に馴染もうと努力する姿勢が感じられ素晴らしいと思いました。海外の方をお出迎えする須坂の玄関口としてショウさんの活躍に目が離せません。

平成27年11月30日
地域おこし協力隊　和田

蒋さんが中国語で発信している須坂市の観光情報「weibo」
http://www.weibo.com/u/5316750228

須坂での子育てと地域との関わり　／　高梨町にお住いの佐藤さん

今回の市民リレーインタビューは、高梨町にお住いの佐藤さんです。生まれも育ちも須坂で、須坂からほとんど出たことはないそうです。4か月になる娘さんのお母さんで、現在は育児休暇を取得し子育てに専念しています。須坂の住み心地についてお伺いしました。

●子育て支援センター
「先日、初めて子育て支援センターに行きました。センターには小さいお子さんでも安心して遊べる部屋があり、今はまだ、自分の娘は利用できませんが、ハイハイしたり、動き回れるようになれば、家の中では狭いので、支援センターのような広い施設があるのはありがたいですね。また、ママ友とも話ができたり、職員の方に子育てについて気軽に相談もできるので、お母さんにとっても嬉しい施設ですね」

●地域との関わり
「今年から区の組長を務めており、回覧板や配布物を同じ組の家に届けたりしています。また、地域では集会や行事もあります。今は子どもも小さく、なかなか参加できていませんが、自分が子供だったころは、地域の行事にはよく参加していました。子どもがもう少し大きくなったら積極的にお祭りにも参加していきたいですね」

●須坂での暮らし
「市内にはたくさんスーパーマーケットがあり、買い物に困ることはありません。お店の駐車場も広く、店内も混んでいないので、レジで待つことはほとんどありません。また市内は、薬局やドラッグストア、コンビニ、病院も充実しているので、生活で困ることはないですね。
最近古民家を改修したおしゃれなカフェや雑貨屋さん、パン屋さん、飲み屋さんなども増えてきているので、お出かけするにもいいですね。ただ、道がわかりにくいので、市外の人は迷ってしまうという話をよく聞きます」

●須坂にあると便利なもの
「子どもも小さいく、できれば市内で大体の買い物を済ませたいので、須坂市内にベビー用品の専門店や大手の衣料品店があるといいですね。また、駅前がもっと賑わうようになればいいですね」

佐藤さんのおすすめスポットは臥竜公園の桜だそうです。また、須坂に来たら是非食べてもらいたいお店は、「東京庵」という街なかの劇場通りにある食堂だそうです。小路にある昔ながらのお店で、おすすめのメニューはカツ重とラーメンだそうです。須坂に遊びに来た際はぜひ訪れて下さい。

東京庵 須坂市須坂本上町88 不定休

佐藤さんインタビューありがとうございます。

平成27年11月11日
地域おこし協力隊 松田

トレイルランニングの魅力と須坂でのトレイルランニングの可能性　／　株式会社ネイチャーシーン代表取締役の大塚浩司さん

　株式会社ネイチャーシーンは長野県の北信濃と神奈川県の湘南を中心に拠点を置き、アウトドアプログラムの企画や運営を行っています。近年は、トレイルランニングという森や山、自然公園などの未舗装の道を走るスポーツのプログラムに力を入れています。

　株式会社ネイチャーシーン代表取締役の大塚浩司さんは、須坂市望岳台出身で高校卒業後、アメリカに留学し金融学を学び、帰国後は外資系の証券会社に就職し、退職後すぐに株式会社ネイチャーシーンを起業されました。
　今回は、大塚さんにトレイルランニングの魅力や須坂でのトレイルランニングの可能性についてお聞きしました。

●アウトドアスポーツに目覚めるきっかけ

「現在、神奈川の藤沢市片瀬山というところに住んでいます。片瀬山は海に近く、証券会社に勤めていた頃、朝5時からサーフィンに行き、その後、会社に行っていました。
　海に入り、人間が自然と一体になる感じに魅了されました。特に、朝日が昇る瞬間と夕日が沈む瞬間を見るのが大好きです。本当にこれこそ人間の生きる姿だと感じ、自然が身近にあるライフスタイルは本当に楽しいと思いました。
　株式会社ネイチャーシーンを起業しようと思ったきっかけは、2点あります。1点目は、リーマンショックを転機にお金よりも本当に自分のやりたいことをやろうと思った事。2点目がサーフィンの仲間で湘南エリアでアウトドアプログラムの会員制のスポーツクラブをやられている方がいました。その方を見て、まさに私がやりたいことだと思った事です。出身が信州なので、山を舞台としてアウトドアスポーツを展開したいと思い、株式会社ネイチャーシーンを立ち上げました。」

●トレイルランニングの魅力

「6年前、長野市の中央通りにビルを一棟借り上げ、『アウトドアで非日常を味わいましょう』というコンセプトでスポーツクラブを始めました。
　しかし、収益にならず、２年間で撤退しました。東京から長野に移住された方にコンセプトは伝わったのですが、長野に住んでいる方は山が日常でコンセプトは伝わりませんでした。
　ちょうど、その頃から、仲間と一緒にトレイルランニングをはじめました。サーフィンと同じくらいトレイルランニングは面白いことに気づきました。山の中を走っていると獣のような感覚になり、人間本来の野生の感覚がパっと目覚めてきます。その感覚が大好きで、トレイルランニングのプログラムをメインで提供していました。
　スポーツクラブの反省も踏まえ、県外からお客さんを集めるビジネスモデルに変え、戸隠でトレイルランニングの大会を開きました。開催したところ大盛況でした。土曜日の夕方に大会を終え、その後パーティーを開き、ゆっくりとお酒を飲みながら親睦を深めてもらいます。その後、開催地域の宿に泊まっていただけるようにしています。そして、日曜日に早起きしてもらい、午前中に地域を観光し渋滞する前に、帰ってもらう仕組みを作っています。
　大会というよりは旅として、トレイルランニングの面白さだけではなく、開催地域ならで

はの貴重な経験を味わえることから、トレラントリップと呼んで旅行気分で楽しんでもらっています。」

●土地柄が出たほど面白い

「トレイルランニングの大会は、地域に特徴がある大会は面白いし、長く続く大会です。逆に運営者が勝手に開き、地域性などがない大会は、人が集まらず長続きしません。
　私が主催したものではありませんが、成功例では、群馬県の神流（かんな）という町があります。過疎地がひどく、高齢化で人口流出してひどい状況でした。危機感を覚えた地域の人が、大会を開きました。何をやったかというと民家にお客さんを300人泊めて郷土食と地酒でその地域ならではのおもてなしをしました。　お客さんに大好評で国から表彰を受けるほどの大会になりました。」

●須坂のトレイルランニングの可能性

「ぜひ、須坂で開催したいという思いがあります。3年前くらいから様々なコースを走っています。私が開催したいのは須坂らしさを出した大会です。
　蔵の町か臥竜山スタートで坂田山、妙覚山、妙徳山、太郎山、井上山、大洞山へ行って竹の城跡に行き、またスタート地点に戻ってくるコースなど面白いですね。
　道路が多いので安全面などに課題がありますが、クリアしながら将来的には開催したいです。」

トレイルランニングを地域資源と組み合わせ、トレイルランニングを旅として提供する大塚さん。インタビューをさせていただき思ったことは、とにかく思いが熱いこと。
大塚さんに刺激を受け、須坂の臥竜山、鎌田山、坂田山を走ってみました。
息をあげながら、山をかけ上がると素晴らしい景色が広がっていました。頑張ったから、よけいに素晴らしく見えました。
開催地域ならではの自然を五感で楽しみ、その地域に宿泊し、一緒に走った仲間や地域の方との交流を楽しむトレイルランニング。
大塚さんの話を聞き、須坂の観光に新しい可能性を感じ、ワクワクしました。
大塚さんインタビューご協力いただきありがとうございました。

株式会社Nature Scene
http://www.nature-scene.net/company/index.html

平成27年12月9日　地域おこし協力隊　和田

須坂のおすすめの場所と子育てについて　／　八重森町にお住いの松田さん

今回のリレーインタビューは、八重森町にお住いの松田さんです。生まれも育ちも須坂で、ご実家は墨坂だそうです。現在5か月になる娘さんのお母さんで、前回リレーインタビューさせていただいた佐藤さんとはママ友だそうです。須坂の住み心地についてお伺いしました。

●須坂に暮らしと子育て
「ずっと須坂で暮らしてきたので、他の地域と比較はできませんが、須坂に住んでいて不安はないですね。子どもを産んだ時、県立須坂病院で診てもらいましたが、病院では助産師さんが親身に対応してくださり、安心して子どもを産むことができました。

　また、地域には病院もたくさんあり、家の近くに信頼できる病院もあります。何かあった時に頼れる病院が近くにあるのは子育て世代の私たち家族にとって安心ですね」

●地域の子育て支援
「市内にはベビー用品専門店が無いので、必要なときは長野市まで買い物に出掛けますが、月1回、市の社会福祉協議会が行っている『へそのこリユース』に参加して、マタニティー用品、子ども服やおもちゃのお下がりを譲り受ける時もあります。経済的に助かりますし、同世代のママさんとの交流ができるのも良いですね。
もちろん市内にお店があると便利ですが、『へそのこリユース』のような気軽に参加できる場があることだけでもとても有難いですね。」

●都会は遊ぶところ
「結婚する前はよく東京に遊びに行きました。東京はいつ行っても何か面白いイベントが行われており、街に活気があって遊ぶにはとても魅力的な場所だと思います。私は高速バスを利用して遊びに行っていましたが、4時間くらいで行けるので、移動時間を気にしたことはほとんどありませんでした。
　ただ、東京では移動にバスや電車など公共交通機関を使うことが多いので、車文化の須坂と違い、子育てをするとなると、周りに気を遣うことが多いように思います。」

●おすすめの場所
「おすすめの場所は湯っ蔵んど(ゆっくらんど）です。県内最大級の日帰り温泉施設で、食事も出来、地元の農家さんの野菜や果物の直売所もあり、温泉以外にも楽しめるのが魅力です。天気が良いと露天風呂から星が見えるので、とても開放的で気持ちが良いです。須坂に来た際は是非訪れていただきたいところです」

松田さんインタビューありがとうございます。

へそのこリユースについて
須坂市社会福祉協議会　長野県須坂市春木町476-1
http://www.suzaka-shakyo.jp/

信州須坂　関谷温泉　湯っ蔵んど
長野県須坂市大字仁礼7番地　不定休
http://www.yukkuland.jp/index.php

平成27年11月26日　地域おこし協力隊　松田